517
520

88

帝國圖書館藏

芭蕉の生涯

山田愛剛著

大正
15. 11. 12
内交

517-520

序

あまねく舊記をさぐつて、芭蕉の事蹟の眞實を詮索することは、私の力におよばない。俳人としての見地から、つぶさに芭蕉の俳句、連句を評價することは、これまた私の力にはおよばない。たゞ私は、平生、芭蕉の人格に傾到してゐる。その思想に共鳴するところがおほい。さては菲才みづからはからず、あへてこの書「芭蕉の生涯」をなすにいたつたので、この書一部、要するに、芭蕉に對する私の思慕の一小發露に外ならぬ。もつて完全無缺の芭蕉傳にあてやうなどとは、私のもとより期しないところである。

おもふに、近來、都鄙を通じて、俳句がはやる。せちがらい、そして俗惡な今の世の中にいみじくも、利害をよそに、趣味の壇場に優遊するだけの餘裕をもつてゐる人の、はなはだすくなくないことを證するもので、何とも會心のいたりであるが、たゞその俳句が、眞の意味での俳句であるかどうかは、私のひそかに疑問とするところである。

俳諧には歴史がある。きびしくは、古今集のするところ、俳諧歌にも遡源するであらう。しかし、それは、あまりに古いとして、宗祇以來、これを前にしては宗鑑、守武、これを後にしては貞徳、宗因など、いづれも滑稽を旨としたのが、芭蕉にいたつて、自然、人事のさび、しをりを生命とするやうになつて、わが俳諧は完成した。爾來、今日におよぶまで、眞の意味での俳諧は、芭蕉風の俳諧を外にして、また他にないことになつてゐる。蕉風すなはち正風である。正風すなはち蕉風である。

であるから、俳句にあそぶものは、まづもつて、芭蕉をしらなければならぬ。芭蕉の生涯をしり、芭蕉の思想をしり、はじめ貞風からはいつて、のち談林に轉じ、ひさしく滑稽の藩籬内を漫歩してゐた芭蕉が、一朝、さび、しをりを生命とするにいたつた思想的轉回をしりいはゆるさび、しをりの何ごとを意味するかをしつて、俳句のこと、はじめてかたるにたへる。いたづらに、や、かなの切字をもちゐ、春夏秋冬の季節をとりいれるにとどまる俳句は形こそ俳句であれ、その實、單なる十七文字の羅列で、眞の意味での俳句ではない。蕉風す

なはち正風の俳句ではない。

あゝ芭蕉、「枯枝に鴉のとまりけり秋の暮」の一吟には、俳眼頓にひらけて、「古池や蛙とびこむ水の音」の一詠には、たちまち天地の閑寂裏に還沒した芭蕉、日本全土にわたる二千有餘の門下から、師とも親ともあふがれた芭蕉、五十一年の生涯、その大半を行脚にすごし、「旅にやんで夢は枯野をかけめぐる」の病中吟を筐として、大阪に客死した芭蕉は、これを藝術家としてみても、もしくは一個の「人」としてみても、まことに希世の大人格であつた。これに傾倒し、これに共鳴するものは、世間決して私のみではない。

しかも、私は、おもつてゐる、芭蕉の人格に傾倒し、芭蕉の思想に共鳴し、われしらずその誘導するところとなつて、與に俱に天地閑寂のまつたゞなかにあそぶことができるならばその人、庶幾くは俳人であり、その言、庶幾くは俳句である。世に俳句作法と標し、俳句入門と榜する書が多々ある。芭蕉の人格を了解することこそ、眞の俳句作法であり、芭蕉の思想を會得することこそ、眞の俳句入門である。他にむかつてもとめるを要せぬと。

さばれ、芭蕉の傳記としては、この書、あるひは誤謬なきを保せぬ。けれど、芭蕉の生涯を彷彿せしめ、その人格、思想をつたへるにおいて、かならずしも失敗の作でないことを確信する。かつ、志を精神修養のことに存する人々にむかつて、かならず涓滴をいたすべきをおもつて、あへてもつて江湖に自薦する。幸ひに一讀せよ。

著者しるす

目次

一 藤堂家の子小姓……一
二 遁世のねがひ……四
三 季吟の門下生……六
四 和歌連歌の復興者……九
五 和歌連歌より俳諧連歌へ……一三
六 俳諧の鼻祖……一六
七 滑稽洒落地口……二一
八 貞風の俳諧……二六
九 芭蕉のその頃……三一
一〇 檀林派に着目す……三六
一一 談林派の主張……四〇

一二、江戸にくだる……四六
一三 水道工事の書役……四八
一四 殘酷なる生活問題……五一
一五 俳諧師として……五四
一六 苦しき生活……六一
一七 自分一己の俳諧……六五
一八 習慣の子……六八
一九 滑稽本位をいさふ……七三
二〇 所詮は『人』……七七
二一 『枯枝に烏』の一句……八三
二二 さびとしをり……八六
二三 貧をあぢはふ……九〇
二四 深川の新住所……九五

二五 艪の聲波の音……九九
二六 草庵の平日……一〇四
二七 『飲酒一枚起請』……一〇八
二八 『芭蕉庵』の名……一一三
二九 『芭蕉野分して』……一一六
三〇 西山宗因死す……一一八
三一 『老杜をおもふ』……一二三
三二 諸行無常諸法無我……一二六
三三 無我解脱の人……一三一
三四 佛頂和尚に參ず……一三六
三五 江戸の大火……一四一
三六 甲斐の山中……一四七
三七 其角の『みなし栗』……一五一

三八 芭蕉庵再建……一五四
三九 瓢の詩と銘と句……一六〇
四〇 野ざらしの旅……一六四
四一 首途の句……一六九
四二 『道ばたの木槿』の句……一七三
四三 伊勢から伊賀へ……一七七
四四 とくとくの清水……一八一
四五 美濃の大垣……一八五
四六 熱田と名古屋……一八九
四七 琵琶湖畔……一九五
四八 歸庵のよろこび……一九九
四九 『自得の箴』……二〇三
五〇 『初懐紙』の撰……二〇七

五一 『古池や蛙』の句……二一〇
五二 雪の一夜……二一三
五三 いとゞねられぬ……二一六
五四 朝顔の畫讃……二一九
五五 『蓑蟲の音』……二二三
五六 『草庵の月見』……二二八
五七 鹿島の月見……二三一
五八 雨後の月……二三五
五九 其角の『續みなし栗』……二三九
六〇 旅は道場……二四五
六一 行脚の掟……二四九
六二 送別の連句俳句……二五一
六三 尾州鳴海まで……二五七

六四 伊良古崎へ……二六三
六五 師走の名古屋……二六七
六六 故郷にありて……二七一
六七 藤堂家のまねき……二七四
六八 吉野再遊……二七七
六九 大阪にいたる……二八四
七〇 夏の須磨明石……二八八
七一 長良川のほとり……二九四
七二 木曾の秋……二九九
七三 山中の一夜……三〇二
七四 田毎の月……三〇五
七五 奥の細道……三一一
七六 まづ日光へ……三一七

七七 那須野ケ原……三二
七八 白河の關……三二六
七九 『しのぶ文字摺』……三三一
八〇 仙臺の數日……三三六
八一 松島にあそぶ……三三九
八二 三代榮華の跡……三四三
八三 出羽の山中……三四六
八四 越後の旅……三五一
八五 加賀ところどころ……三五八
八六 齋藤實盛の兜……三六三
八七 福井と敦賀……三六六
八八 如行亭にいる……三七〇
八九 鉢たゝきをきく……三七四

九〇 石山の幻住庵……三九八
九一 『幻住庵の記』……三八二
九二 京大阪の貧乏子……三八五
九三 義仲寺内の無名庵……三九〇
九四 『猿蓑』の撰……三九五
九五 『嵯峨日記』……四〇〇
九六 杜國を夢みる……四〇五
九七 『月見の賦』……四一二
九八 『既望の賦』……四一六
九九 『閉關の說』……四一九
一〇〇 許六の入門……四二三
一〇一 『柴門の辭』……四二六
一〇二 松倉嵐蘭をいたむ……四二九

一〇三 最後の西行……四三四
一〇四 故郷の二個月……四三八
一〇五 奈良から大阪へ……四四三
一〇六 園女亭の一日……四四六
一〇七 にはかに發病……四五一
一〇八 花屋の裏座敷……四五四
一〇九 入用品受取覺……四五七
一一〇 滅後の俳諧……四六一
一一一 奉納の句ども……四六五
一一二 『病中の吟』……四六八
一一三 其角きたる……四七二
一一四 門下の句ども……四七四
一一五 臨終の狀……四七八

芭蕉の生涯目次終

一一六 遺骸をうつす……四八一
一一七 伊賀の兩門人……四八四
一一八 おくつきどころ……四八七
一一九 遺物その他……四九〇
一二〇 『芭蕉翁終焉記』……四九四
一二一 追憶の句ども……四九九
一二二 伊賀のたより……五〇三
一二三 鳥羽の文臺……五〇八
一二四 追善の句ども……五一四

芭蕉の生涯

山田愛劍著

『俳人』としての芭蕉、『藝術家』としての芭蕉のかたはらに、『人』としての芭蕉があつた。前者をわすれないで、しかも後者におもきをおきつゝ、この一編『芭蕉の生涯』をつゞつてみる。

一 藤堂家の子小姓

正保元甲申年の某月某日、伊賀の國は上野城下なる松尾家では、男の子がうまれた。松尾家の當主與左衛門は、伊豫宇和島の人桃地氏の女を妻とし、夫婦のなかに、これまで男の子が二人あつた。長男は儀左衛門。手習師匠をしてゐた。次男は半左衛門。兄早世の後をうけて、父の跡をつぎ、上野城代藤堂新七郎良精につかへた。伊賀は、伊勢の藤堂氏に屬してゐ

たところから、その同族なる新七郎が、城代として上野城にゐたのであつた。今度うまれたのは三人目で、はじめ半七郎といひ、のち忠左衛門とあらためた。

承應元年、九歳のとき、半七郎は、兄半左衛門の縁故によつて、城代新七郎の息主計良忠の子小姓にめしだされた。このこと、はからずも、この半七郎が、後年俳人芭蕉としてしられる因縁にならうとは、當時何人ものおもひまうけなかつたところで、不思議なものは、人一代の運命であつた。

といふのが、この良忠は、武人ながら文人肌の人で、俳諧を京都の北村季吟（キギン）にまなび、吟号し、

大阪やみぬ世のゆめの五十年
そりたかき霜のつるぎや橋のうへ

などの句があつた。

また山城伏見西岸寺の任口上人といふが、おなじ藤堂の一門で、しかも俳諧をよくしたところから、この人ともしたしくし、あへばかならず俳諧を談じ、佛道の話をきゝなどした。

かうした人を主人として、朝に、夕に、そのかたはらに近侍した芭蕉は、體のあまり丈夫でない、きはめて溫和な、いづれかといへば、これまた文人肌の少年であつた。自然蟬吟公の寵愛もあさからず、その感化のもとに、やうやく俳諧に趣味をおぼえ、佛道の一端をきゝしるやうになつた。明暦三年、十四歳の正月の句といふに、

いぬとさる世のなかよかれ酉の年

去年は申年、來年は戌年。犬と猿とは、なかのわるいもの。そこで、あひだにたつた今年雞が、兩者のなかをよくするといふにかけて、「世のなかよかれ」といはつたのであつた。

ついで寛文四年、二十一歳のときには、

姥櫻さくや老後のおもひいで

といふ句があり、翌五年、二十二歳のときには、

ねたる萩や容顔無禮花の顔

といふ句があつた。蟬吟公の感化は、かくて芭蕉をして漸次俳人たらしめやうとしたのであつた。

しかも蟬吟公の感化のみではなかつた。芭蕉は、公の句と自分の句とをあはせたづさへてしばしば京都へのぼり、季吟の添削をこうた。これ季吟に入門したも同然で、芭蕉の俳諧はますます上達せざるを得なかつた。

かくて芭蕉の蟬吟公におけるは、もと主従でありながら、同時に師弟でもあり、俳友でもあつた。しかも「同氣あひもとめ、同類あひひく。」の理で、それは、もつともしたしい師弟であり、もつともむつまじい俳友であつた。

二　遁世のねがひ

しかるに、その翌寛文六年夏四月、時鳥のなきそめるころ、蟬吟公は、年まだわかくて、にはかに世をさられた。「生者必滅、會者定離。」のことわりは、芭蕉のかねてしることろながら、十數年のひさしいあひだ、海山たゞならぬ恩愛をかうむり、師とも、親とも、兄とも、友ともしたつてゐた人にわかれたのである。多感の芭蕉は、斷腸の感やむ時なく、日をかさねて、なきあかしたあげくには、つひに遁世の心をおこすにいたつた。

『まことに「生者必滅」ぢや。人の命は、今日をもつて明日をはかることもできぬ。』とおもふにつけて、

『そんなはかない身をもちながら、われも、人も、五慾、三毒の奴となつて、名をあらそひ利をむさぼる。一體どうした間違ぢやらう。露を命の人間なら、たゞひ名を天下にとゞろかし、金を山ほどつんだとて、そんなものは、槿花一朝の榮にすぎぬぢやないか。たちまち夢になるのぢやないか。しかも世間に身をおくかぎりは、名利のわづらひをうけにやならぬ。さうぢや、斷然世をのがれやう。そして佛門に歸さう。無常の世には、山林こそ、もつともしづかなかくれ場所ぢや。』といふのであつた。

よつて同年六月、遺髪を高野山へをさめる時には、みづからすゝんで、その使者にたち、同山の報恩院で、あつく供養をいとなみ、上野へかへると、すぐにも遁世しやうとしたが、親族のひきとめやら、同僚のいさめやらに餘儀なくせられて、頓にはその擧にでることができなかつた。

が芭蕉の決心は、そのまゝやみうるには、あまりに鞏固であつた。もつとも、それには別

に一つの理由があつた。體のよわい、そして文人肌の芭蕉は、自分が武士たるに適しないこ
ゝをしつてゐた。自然武ばつたことがきらひで、たゞたゞ文筆にしたしんだ。なほかつ多年
にわたつて武家奉公をしたのは、主人が蟬吟公であつたればこそであつた。蟬吟公のないの
ちに、依然藤堂家にとゞまることは、芭蕉のしのびうるところでなかつた。自分ゞ周圍とが
全然毛色をことにしてゐることをおもふと、ほゞんど寂莫の感にたへなかつた。かくて芭蕉
の決心は、いやがうへにもかたく、百方におもひかへし、おもひめぐらしたするに、一夜同
僚なる城孫太夫の門に、

雲とへだつ友かや雁のいきわかれ

の一句をのこしておいて、そのまゝ上野を脱走した。翌寛文七年春二月のことで、ときに
年二十四であつた。

(三) 季吟の門下生

しかし芭蕉の心もちは、このころ、いくらかかはつてゐた。去年蟬吟公の死に會したとき

には、一途に佛門にとこゝろざしたが、爾來約一年、また世にでて名利をはかる心はないな
がら、風心のそゝるこころ、
『自分は、いつそ俳諧師にならう。』このかんがへになつてゐた。おなじく世をのがれるので
はあるが、佛門にのがれないで、俳諧にのがれるこいふもの、脱走當時における芭蕉の心事
であつた。

であるから、故郷上野をたちのくとすぐ、芭蕉は、京へのぼつて、季吟の門にいり、東山
の麓にすみ、もつぱらこの道の修行に腐心しつゝ、七個年をすごした。

俳諧、くはしくは俳諧連歌といつた。通俗な言葉をもつてした連歌、これが俳諧連歌で、
もと和歌連歌に對する稱であつた。發句とは、連歌の初發の一句のことで、のちその一句の
みを單獨によむことが流行し、これをも發句といふやうになつた。

和歌連歌の起原は、きはめてふるく、その法式は、鎌倉時代にさだまつた。室町の中葉以
後、一時中絶に歸したが、宗祇法師がでて、ふたゝびさかんになり、守武、宗鑑らの俳諧連
歌へと、次第に發展していつた。

宗祇は、和歌連歌の天才であつた。まだ壯年のころ、時の連歌師猪苗代兼載にむかつて、連歌のことをとふと、兼載は、宗祇の顏をつくづくとみて、

『をしいかな、十年おそい。連歌は、なかなかむづかしいもので、二十年の功をつまなければ、その妙にはいたりかねる。』ことたへた。宗祇は、

『では、十年のあひだ、晝夜はげんだらいかゞ？』といきどほつた。この言葉に、兼載は、あきれかへつて、

『こても私のおよぶところぢやない。』といつた。

そんな風であつたので、のち攝津の俳人鬼貫をして、「當時無双」と評せしむるほどの連歌師となつた。あるとき近所に難産があると、その家へのぞんで、

摩訶般若はらみ女の奇特かな

まづ宗祇がいふと、

一二もすんでさんの紐とく

と、弟子の宗長が脇をした。するとたちまち、男の子がうまれた。

また時の帝が瘧をおわづらひになつたのを、連歌の力でおなほしまをしたこともあつた。號を種玉庵とも、自然齋ともいつた。いづれの年か、仲秋三五の夜がくもつて、月見の宴も、あはれ臺なしになつてしまふと、

一とせの月をくもらす今宵かな

となげいた。

また述懐の句に、

世にふるはさらは時雨のやどりかな

宗祇は、きはめて無慾恬淡な人で、一生の大部分を旅ですごし、文龜二年秋八月、相州湯本の客舍に歿した。壽八十有二。

はかなしや鶴の林の煙にもたちおくれたる身こそうらむれ。

といふ辭世があつた。

四　和歌連歌の復興者

宗祇の門人に、右の宗長法師があり、今一人、肖柏法師があつた。

宗長は駿州島田驛なる鍛工某の子としうまれた。國司今川義忠は、その幼にして才あるを愛し、めしだして左右においた。年十八、佛法を普門院にとひ、のち紫野の一休和尚に參禪した。

あるとき、宗祇にまみえて、連歌のことをたづねるのに、「一をきいて、十をしる。」といふ風であつた。以後その門下にいり、つひに出家改名し、驛中に草庵をむすんだ。

明應の年、師の宗祇が勅命をうけて、「新筑波集」をえらんだ時には、宗長の連歌二十八句をいれた。いづれの年か、行脚の途次、伊勢の國關地藏にとまるこ、をりから庭の立花がさかりなのに、

立花のかにせゝられてねぬ夜かな

世に出藍のほまれがあり、師の歿後、同門の人たちは、

『天下花の本の宗匠になられよ。』とすゝめた。宗長は、

『いや、自分などにはおもひもよらぬ。』といつて、一向とりあはなかつたが、たれかれから

おして奏聞をとげた結果、やがてその跡たるべきよしの御諚があつた。

老後、居を泉谷にうつして、みづから柴屋軒と號した。庭前に山谷をみやつて、四時の興のつきないことをよろこびながら、

山櫻おもふ色そふ霞かな

その翌年、

『いく千代もしげれ。』と、みづから竹をうゑて、

いく若葉はやしはじめの園の竹

あるとき貴人がたちよられて、附合があると、この句その冠頭となつた。

大永の末、その竹を杖にきつて、今川公に献じ、

この杖はたれにはあらず君とわれ八十路の坂をこゆるたのしさ

の一首をそへた。

連歌は、勿論その蘊奥をきはめて、名吟のおほかつたがなかに、

手もたゆくあらき島回をこぎめぐり

こいふのに、

ゆもとりあへず物をしぞおもふ

と附句した。「賴政集」に、「ゆをとるよりもしげき涙を。」とあり、「ゆ」とは、船の阿伽のことか。またもつて、その造詣を見ることができた。

宗祇におくること三十年、享祿五年三月、高齡八十五歳をもつて物故した。

牛の角に金箔をおき、それにのりあるいて興がつたよし、つたへられる肖柏は、具平親王の遠孫であつた。一年、宗祇から連歌の道統をうけて、みづから牡丹花と稱し、

春さかぬ花の心や深見草

の句があつた。

あるとき、禁裡の十五夜の御會に伺候して、

空においてみん夜や幾世秋の月

かつて雨乞をして、

空にしるや雨をのぞみの秋の雲

老になんとして、攝津の池田にかくれ、その居を夢庵と名づけた。また庭に四時の草花をうゑ、その軒に題して、弄花ともいつた。酒をこのみ、香をめで、花をたのしみ、これを三愛と稱し、みづからその記をつくつた。のち故があつて、泉南にうつりすんだ。

文龜二年、勅命によつて、「新式今案」を草し、連歌の法をさだめたくらゐで、勿論その道の巨匠であつたが、大永七年四月四日、同門の宗長にさきだつこと五年、これも八十五歳で世をさつた。

のち數十年、織田、豐臣の兩時代を通じて、連歌が流行し、里村紹巴などいふ名人もでたが、宗祇およびその門下なる宗長、肖柏兩法師こそは、その先驅をなすものであつた。

五　和歌連歌より俳諧連歌へ

が、宗祇時代の連歌は、和歌連歌であつた。古語をおほくもちひて、たゞたゞ優美ならんことをほつしたところは、一見和歌とことなるところがなかつた。紹巴の連歌とても、

船とめし枕は秋の浦波に　紹巴

月を旅寢の袖のかたしき　同

といつたやうなもので、やはり同斷であつた。その發句は、和歌の上の句と大差がなかつた。

かうした和歌連歌を通俗化し、平談俗語をもちひて、いはゆる俳諧連歌としたものには、荒木田守武があり、山崎宗鑑があつた。この二人こそは、實に俳諧連歌、略しては俳諧の創立者であつた。

守武は、伊勢內宮の神官であつた。はじめ和歌連歌をこのんで、一時に名があつた。ある日、連歌興行の席へのぞむと、みんな法體の人ばかりであつたので、をかしさに、

お座敷をみればいづれもかみな月

と一笑した。すると、そばに宗祇がゐて、

ひとり時雨のふり烏帽子きて

とつけたのは、時にとつての一興であつた。いはゆる一人は、守武のことであつた。

かつて童子の教訓にと、一夜に百首を詠じ、毎首「世中」の二字をつけた。名づけて「世

中百首」といひ、國の人は、「伊勢論語」とまで尊重した。

のち俳諧をはじめて、その鼻祖となつた。その連歌に、

口の中にもいるは山伏　守武

かねをだにつくれば人ははぐろにて　同

山伏といへば、羽黑山を聯想する。その羽黑の山伏が祈禱をすると、人は勿論、天狗さいへども、口の中へはいる。けれど、羽黑の山伏たること、むづかしくはない。鐵漿をさへつければ、齒がそまつてはぐろとなるとの滑稽であつた。

その發句に、

元日や神代のこともおもはるゝ

撫子や夏野のはらのおとしだね

落花枝にかへるとみれば胡蝶かな

花よりも鼻にありけるにほひかな

など、その調が比較的に高尚で、他人のおよびえないところがあつたのは、神官なる職掌

柄が、しからしめたのであつた。

また獨吟千句を物して、卷頭に、

飛梅やかるがるしくも神の春

の一句をおいた。これまた不易の什と評せられた。

天文十八年をもつて他界した。宗祇におくること四十七年であつた。辭世の歌に、

こしかたもまたゆくすゑも神路山峰の松風峰の松風

おなじく發句に、

朝顏にけふは見ゆらんわが世かな

以上にひくところ、守武の連歌、發句は、宗祇乃至紹巴のそれにくらべて、その用語が、古語の優美なところから、俗語の卑近なところへうつり、大分通俗化せられてゐた。そこに俳諧の鼻祖たる特色があつた。

六　俳諧の鼻祖

けれど守武の連歌、發句には、まだまだ和歌臭味がのこつてゐた。これをひきさげて、さらにおほいに通俗化し、俳諧の俳諧たる本色を發揮せしめたもの、それは宗鑑であつた。

宗鑑は江州の人、本姓支那氏、父祖代々足利家につかへた。長享元年、近江の佐々木高頼が、命に抗して、上洛をがへんじなかつたとき、將軍義尙は、みづから兵をひきゐて追討しその功によつて、同二年、內大臣に任ぜられ、名をも義照とあらためた。しかるに義照は、延德元年、いまだ壯歲ならずして薨じた。宗鑑は、そのとき二十五歲であつたが、ふかく主從のわかれをかなしみ、つひに致仕して剃髮し、攝州尼ヶ崎にしりぞき、のち城州山崎の竹林にのがれ、よつて山崎氏を稱した。

宗鑑は、かねて和歌連歌に達し、また俳諧にも長じてゐた。あるとき逍遙院實隆卿へまゐつて、平日愛するところの杜若を献じた。卿は、それを御覽になつて、

手にもてる姿をみればがきつばた

とたはむれられた。宗鑑は、言下に、

のまんとすれど夏の澤水

餓鬼は、渇にせまつて、水をのまうとするこ、その水たちまち火となつて、もえあがるといふ。それをいつたのであつた。するこ同行の宗長が、それをうけて、

蛇におはれていづちかへるらん

と、第三をつけた。

滑稽自在は、宗鑑の天性であつた。ある人が、

尻毛をつたふこ雫とくとく

とつくつて、その附句をのぞむこ、

水鳥の尾羽の氷けさとけて

またある人が、

きりたくもありきりたくもなし

『これの附句三句を……』と所望すると、

盗人をとらへてみればわが子なり

さやかなる月をかくせる花の枝

こゝろよき的矢のすこしながいのを

その俳諧連歌に

宗鑑

月日の下にわれはねにけり

同

暦にてやぶれをつゞる古襖

いふまでもなく、暦を月日にみたてたのであつた。その發句に、

手をついて歌まをしあぐる蛙かな

摺子木にしらるな蓼の花ざかり

うづききてねぶとになくや時鳥

この句、「うづき」は、卯月と腫物のうづきとをかけていひ、「ねぶこ」は、時鳥のなく音のふといのと、腫物の根太とをかけていつたのであつた。

月に繪をさしたらばよき團扇かな

すゝれなほ鼻をかまんとかみな月

がさをきば雨にもいでよ夜半の月

「かさ」は、傘でもあり、暈でもあつた。

晩年西國におもむき、歸路、讃州琴山の麓に假居して、一夜庵といつた。天文二十二年、癩をやんでしんだ。守武の死後、五年目であつた。年八十九。辭世に、

宗鑑はどこへと人のとふならばちよと用ありてあの世へといへ

宗鑑が、主人義照の薨去をかなしんで致仕退隱したのは、芭蕉が、主人禪吟の他界をなげいて脱走隱遁したのと、まさしくその揆を一にした。芭蕉も、こゝにみるところがあり、後年宗鑑の遺蹟をさぐつて、

ありがたき姿をがまん杜若

の句があつた。

右にしるすところ、宗鑑の連歌、發句にあつては、古語の優美は全然うしなはれて、平談俗語のもつとも卑近なものが、遠慮會釋もなくもちひられた。守武の通俗化は、宗鑑にいたつて、その極に達した。俳諧なる語が、前いふとほり、通俗な言語をもつてした連歌を意味するならば、宗鑑こそは、まさしく俳諧の鼻祖であつた。俳諧の鼻祖たる特色が、守武以上

に鮮明であつた。

七　滑稽酒落地口

宗祇などの和歌連歌の特色の一つは、滑稽といふこと、酒落といふことであつた。用語の優美なことは、さながらの和歌でありながら、連歌には、また滑稽とか、酒落とかいつた要素を混じてゐた。けだし連歌の特色であつた。

しかるにこの特色は、俳諧連歌において、一段といちぢるしいものがあつた。守武の俳諧がさうであつた。宗鑑の俳諧になると、一層はなはだしく、ほとんど滑稽を旨とするものやのうにさへみえた。滑稽から酒落へ、酒落から地口へ墮したものさへ多々あつた。これ、用語の通俗化にもとづく自然のなりゆきながら、到底俳諧の弊事であつた。

しかもこの弊事は、數十年後の松永貞徳におよび、その門下におよび、芭蕉の師なる季吟におよんで、ながくあらたまらず、芭蕉の正風によつて、はじめて匡救せらるゝをえた。

貞徳は京都の人、幼名勝熊、長じてのちも、髻をつかね、童服をつけ、みづからよんで延

陀丸または長頭丸といひ、逍遙軒と號した。つねに和歌連歌をこのんで、玄旨法印を師とし木下長嘯子とも親交した。

一年、三條の大路へでて、「徒然草」を講ずると、聽衆に富豪某なるものがあつて、いたくその高辯に服し、花開の地を寄附した。その地、むかしから社があつて、しかも祭神をしらなかつたが、貞德が琴書をうつした晩、夢に異人があらはれて、口づから一句を誦した。さめておもつた、

『これ靈場ぢや。もつてわが道をおこすことができる。』と、早速社殿をいとなみ、號を花開稲荷と献じた。

その年の秋、天朝から「俳諧花の本」の稱をたまはつた。よつて去嫌の書をあらはして、俳諧の法式をさだめ、「御傘」と名づけた。天子の御傘に比して、「さしあふこゝならず」この意であつた。爾後この道にいるものは、すべてこれを典據とした。

その句に、

けさたるゝつらゝや涎の牛の年

鶯よかけて卵をうめの花

むつきてふいづれの初のおほんとき

「むつき」は、睦月と襁褓とにかけていつたのであつた。

ねぶらせてやしなひたてよ花のあめ

「あめ」は、雨でもあり、飴でもあつた。

花よりも團子やありてかへる雁

雪月花一度にみするうつぎかな

みな人の晝寢の種や秋の月

冬ごもり虫けらまでもあなかしこ

「あな」は、感嘆詞のあなゝ穴ゝの双方を意味するのであつた。

晩年、不幸にして失明した。失明後の子三人。順に珍重、滿足、祝着と名づけた。成長ののち、珍重は、僧となり、滿足は、執筆となり、祝着は、どうなつたか判然しないことのことであつた。

當時、貞徳の勢力は非常なもので、やんごとなき方のおおぼえもめでたく、ある年には、堯然親王から、大佛殿の南に、地若干をたまはつた。よつてみづから果樹を植ゑ、榜して柿園といひ、うちに報恩藏を設けて、陳子昂筆妙經千部ををさめ、藏外に上宮太子、達磨大師柿本人丸、紀貫之、紫式部、藤原定家卿など六人の像をゑがかせた。まへに吟花廊をしつらへて、詩、歌、連、俳の短冊をあつめ、たゞちに芦の丸屋へ通ずるやうにした。方域、東西二十間、南北三十間。めぐらすに竹垣をもつてしたところは、まことに堂々たる庭園ぶりであつた。

承應二年、壽八十三をもつて歿した。辭世に

明日はかうと昨日おもひしことも今日おそくもかはる世のならひかな

門下に、立甫、重頼、貞室、西武、梅盛、季吟、松堅の七哲をはじめとして、德元、令德未得、玄札、一宵、安靜、宗畔、道節、定重などがあり、いづれも道の宗匠として、京都、江戸、大阪、伊勢、美濃などにあつて、さかんに貞門一派の俳諧をとなへ、一時になつた。

かくて貞徳は、當時垂死のさかひにあつた俳諧をすくつて、天下に流行させることはできたが、さてその俳諧なるものが、滑稽を旨として、地口に墮したところは、守武、宗鑑の先蹤をおそつたまでで、特に新味のみるべきものはなかつた。

門下もまた同斷で、

ふる雪は柳の髪のみだれかな　立甫

順禮の棒ばかりゆく夏野かな　重頼

すゞしさのかたまりなれや秋の月　貞室

芋も子をうめばさんごの月夜かな　西武

「さんご」は、三五と產後とをかけた洒落であつた。

ゆく人の道草となる夏野かな　梅盛

洗濯やたらひの月もすまし物　松堅

ざつこんな風であつた。師弟ともに、守武、宗鑑以來の弊事をうけて、くゆることをしらないのであつた。

八　貞風の俳諧

芭蕉の師北村季吟の俳諧が、やはり同樣であつた。

季吟は江州北村の人、はじめ醫を業とし、庭庵といひ、のち京都玉津島の祠官となつた。博覽强記、國學に長じ、後進のこの道を主とするものは、大抵この人を宗とするの例であつた。著書に「源氏物語湖月抄」、「枕草子春曙抄」をはじめ、「大和物語」、「徒然草」などにいたるまで、註するところ、五十餘種におよんだ。その學德、はるかに將軍家のお耳にいり、關東へめされて、歌學所に補せられ、食祿五百石をたまうた。

かくて季吟は、俳人としてよりも、國學者としてきこえたが、俳諧もまた上手であつた。はじめ貞室を師とし、中年以後、貞德に學んだ。その句に、

一僕とぼくぼくありく花見かな

腹筋をよりてや笑ふ絲柳

女郎花たとはゞあはの内侍かな

まざまざといますがごとし靈まつり

富士の山師走ともなきけしきかな

など、さすがに一種の雅韻はありながら、貞風の藩籬を脫するにはいたらないで、大部分滑稽を旨とし、洒落を詮とするものであつた。

歿したは寶永二年、壽八十八。

芭蕉が、故鄕伊賀にある際、その主蟬吟公と共に、俳諧を季吟にまなんだことは、前にしるした。その緣故から、今度京都へでるとすぐ、その門下にはいつた。しかも俳諧師になるかんがへでるたこととて、その熱心、その勉强は、前に倍していちじるしいものがあつた。自然芭蕉の天才は、日にのび、月に長じ、いまだいくばくならざるに、一かどの手腕をそなふるにいたつた。

しかるに季吟の俳諧は、右のやうな、いはゆる貞風の俳諧であつた。その門下なる芭蕉も二十九歲、江戶へでるまでは、大體において、そのむきの俳諧ををさめ、發句をつくつてゐた。

すなはら寛文七年には、

あち東風や面々さばき柳髪
夏近しその口ばたへ花の風
絲ざくらこやかへるさの足もつれ
風ふけば尾のほそうなる犬櫻
うかれけり人やはつせの山櫻
花はしづの目にも見えけり鬼薊
春風にふきだしわらふ花もがな
五月雨におんものどほや月の顔
ふる音に耳もすうなる梅の雨
岩つゞじそめる涙や時鳥
たんだすめすめば都ぞけふの月

同十年には、

うち山やとさましらずの花ざかり
五月雨も瀬ぶみたづねぬ見馴河

同十二年には、

女夫鹿や毛に毛がそろうて毛むづかし
和歌のあととふや出雲の八重霞
きてもみよ甚兵衛が羽折花ごろも
時雨をやもどかしがりて松の雪

などの句があつた。おほくはこれ貞門風の句で、守武、宗鑑以來の弊をうけついだものならぬはなかつた。のちの芭蕉の句と相比しきたるとき、何人もその同一手にでたことをうたがはざるをえないほどの句のみであつた。

寛文十二年、二十九歳のとき、「貝おほひ」がでた。これは、芭蕉の著書中最初のものであつた。序文に、

小六ついたる竹の杖、ふしぶしおほき小唄にすがり、あるははやり言葉の一癖あるを種

さして、いひすてられしことどもをあつめ、右と左にわかちてつれぶしにうたはしめ、そのかたはらにみづからが、みぢかき筆の辛氣はらしに、清濁高下をしるして、三十番の發句あはせをおもひ太刀、折紙の式作法もあるべけれど、わがまゝ氣まゝにかきちらしたれば、世に披露せんとにはあらず。名を貝おほひといふめるは、あはせて勝負をみるものなればなり。また神樂の發句を卷軸におきぬるは、歌にやはらぐ神心といへば、予がこゝろざすところの誠をてらしみたまふらんことをあふぎて、當所あまみつおほ神のみやしろのたぶけぐさとしぬ。

寛文十二年正月二十五日、伊賀上野松尾氏宗房、釣月軒にてみづから序す。

「松尾氏宗房」は、芭蕉自身のことで、芭蕉は、當時、宗房と號してゐた。

さてその内容は、

一番　左勝

にほひある聲や伽羅ぶしうたひぞめ

右

春の唄やふとぐいでまをすうたひぞめ

左の句は、にほひもたかき伽羅ぶしの、優曇華よりもめづらにおほえはべる。右もまた春の唄はふとくおほきにといふより、まことに大舞のほどもしられはべれとも、一聲二節ともいへば、なほにほひある聲に心ときめきはべりて、左を勝となす。

大體この例になつてゐて、その滑稽を旨とした點は、また貞門一派のものたるをまぬがれなかつた。

これよりさき、芭蕉は、二人の同志とともに、筑紫行脚をこゝろみ、太宰府にまうでた。それについて、後年加賀金澤の北枝にあたへた消息に、

西國には、なにとぞ同行いたしたく候あひだ、そのおこゝろえ、たのみいり候。さやうに候へば、雨吟いそぎまをすこともなく候。二十六七年前、太宰府へ參詣いたし候。外連中二人、われら三人にて歩行候へども、知音もなく候て、見物所ばかりたづねかへり候。宗房時分のことに候へば、所々發句とゞめ候へども、をかしからず、とゝのはぬことのみにて、一句もはくことなく候あひだ、このたびは吟じなほしたき存念に候。その

もと同行においては、十人にまさり力をえ候ここに候。決定の御返事まちいり候。
すなはちその際も、やはり貞門の風をおそつた滑稽專一の句を、諸所によみのこしたので
あつた。

九　芭蕉のその頃

まことにその頃の芭蕉の句には、後年のそれと比較して、その距離のこほさ、
『これがおなじ人の作かしら?』とうたがはれるやうなのがおほかつた。後年、「さび」とか「をり」とかを旨とする正風をはじめた芭蕉、主人蟬吟公の死をかなしむのあまり、遁世の心を生じ、故郷を脱走して、京へのぼつた芭蕉、其角の「芭蕉翁終焉記」にもみえてゐるとほりのちには、

天和三年の冬、深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり、苦をかつぎて、畑のうちにいきのびけん、これぞ玉の緒のはかなきはじめなり。こゝに猶如火宅の變をさとり、無所住の心を發して、

無常の感をあらたにした芭蕉、

その次の年、其のなかばを甲斐がねにくらして、富士の雪のみつれなければこ、それより三更月下入無何こいひけん、昔のあとにたちかへりおはしければ、人々うれしくて、
燒原の舊草に庵をむすび、しばしも心とゞまるながめにもとて、一株の芭蕉をうゑたり
雨中吟、芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな、とわびられに、堪閑の友しゆくかよひて、
おのづから芭蕉翁こよぶことになんなりぬ。

かくして芭蕉の號をえた芭蕉、

元來根本寺佛頂和尚に嗣法して、ひとり閑禪の法師といはれ、一氣鐵鑄生いきほひなり
けれども、老身くづほるゝまゝに、句毎のからびたる姿までも、自然に山家集の骨髓を
えられたる、ありがたや。さればこそ、この道の杜子美なりともてはやして、

世にも人にもおもんぜられた芭蕉、かうした人なる芭蕉が、まだ年がわかかつたこはいへ、
貞門の一俳人として、幾年かをすごしたといふことは、おもへば不思議のいたりであつた。
前にゝくりかへしたとほり、貞風の俳諧なるものは、滑稽を詮とするおあそびであつた。

滑稽はまだよい。滑稽から洒落におち、洒落から地口に墮してゐた。そこには、さびもしをりもない、まことに淺薄きはまるものであつた。

こゝにおいて、いふものがあつた。

『當時の芭蕉は、故主人をしのび、世をはかなむ一念に、ほとんどたへがたいおもひをしながら、涙の日また日をおくつてゐた。さては貞門一派の俳諧にあそび、滑稽洒落の遊戯文字にみづからまぎらして、一時苦悶をわすれたのだ。』かういふもののある一方には、

『いや、それは、うがちすぎた說だ。また人間の心理にもそむく。かなしむもののなぐさめは、その人が、まだ運命の繫縛から解脫しえないでゐるかぎり、たゞなくにある、うつたへるにある。滑稽や洒落は、たまたま、そのかなしみを大にするにすぎない。なんの慰藉にもなるものぢやない。』

『ぢや、どういふことなのだ?』

『人は、存外自分をしらないものだ。現に自分の從事してゐる學問なり、技藝なり、職業なりが、はたして自分の性格に適合するものかどうか、自分の趣味に合致するものかどうかは

ちよつとわからない。それがために、しらずしらず、周圍の事情とか從來の關係とかに、ある方向へひきずられてゆく。芭蕉が、ちやうどそれだつたのだ。』かういふものもあつた。

なる程それに相違なかつた。貞風の俳諧は、決して芭蕉の性格にあふものではなかつた。けれど芭蕉は、それと氣づかなかつた。さては伊賀にゐた時分から、蟬吟に化せられ、季吟にをしへられた從來の關係にひきずられて、上京ののちも、季吟にしたがひ、依然として貞風の俳諧をもてあそんでゐたのであつた。

かつ當時の芭蕉は、貞風以外に俳諧のあることをしらなかつた。いはんや貞風のさかんなる、天下を風靡するの概があつたにおいて、芭蕉が、その渦中にまきこまれ、あへて脫却しやうとしなかつたのも、やむをえないことであつた。

また貞風を脫するには、あらたに一流をはじめなければならなかつた。けれど若年の芭蕉には、それほどの力量はなかつた。こいつて、武士になるのはこのましくない。營利をこととする商人などは、なほさらがらにない。かたがたで、貞風の俳諧に不滿はありながらも、なほかつ若干の趣味をおぼえつゝ、たゞうかうかと、滑稽、洒落の藩籬內にさゞまつたので

あつた。

けれどそれは、芭蕉の天性乃至趣味が、まだ充分にのびないうちのことであつた。のびてののちは、それらについての自覺がはじまつた。自分に對して目ざめてきた。自然自分の從事してゐるところが、自分に不適當であることに氣がついた。

『これは、ほんの遊戯ぢやないか。自分は、こんな遊戯文字のために、全精神をうちこむことは出來ぬ。自分のやすんじうる境地は、どこか他方面にありさうぢや。なんとかそれを發見したい。』のちには、こんなことをおもふやうになつた。

一〇　談林派に着目す

かくて芭蕉の思想界に一大變動があらうとしたとき、おびたゞしくこれを刺戟したもの、それは、あらたに勃興した談林派の俳諧であつた。

談林派の祖西山次郎豐一は、もと肥後の國加藤侯の臣であつた。はじめ昌琢について和歌連歌を學び、のち俳諧にこゝろざし、もつとも守武、宗鑑の風流をしたつた。天性奇才にとんだ人とて、道にすゝむこと衆にこえた。寛永中、主人加藤廣忠が、大船建造のことによつて、罪を幕府にえ、國除せられると、國をさつて上洛し、ひそかに俳道に心をよせ、貞風を感破して、つひに一派を創始するにいたつた。すなはち薙髮して、名を宗因とあらため、洛北北野に幽棲し、轉じて難波の天滿に卜居し、齋を忘吾、庵を向榮といつた。

その俳諧に、

しかたばかり肌おしぬいで十文字　宗因
かしからやつてさます借錢　同

浪人でもあらう、どこかの裏店住居をしてゐるうちに、收入のない身とて、米屋にも炭屋にも、借錢ができる。きびしく催促せられ、なんともいひわけがなくて、せつぱつまつたあげくには、

『この上のおわびには、當家の一室を拜借して、切腹いたす。それにて勘辨をねがひたい。』とばかり、肌おしぬいで、腹きりの狂言をやる。相手はおどろいて、

『まあ、まあ……』ととめる。そんなことをして、うまく借錢をさますといふ滑稽であつた。

その發句に、

新春の御慶はふるき言葉かな

書初や行年七十攝州の住

世の中や蝶々とまれかくもあれ

花に斗酒みなおいてきたありさまなり

うつりゆくはやいかのぼり紙幟

初花やいそぎ候ほどにこれははや

ありあけの油ぞのこる時鳥

蚊柱やけづらるゝなら一鉢

摺子木も紅葉しにけり唐がらし

白露や無分別なるおきどころ

西行像讃

秋はこの法師姿のゆふべかな

いろはにほへの字形なる薄かな

不二や扇おつとりなほしこれをたゞふ

さるほどにちゞに物こそかなし佛

延寶三年、門人松倉松意のまねきによつて、江戸にくだつた。松意は、神田鍛冶町に住しその居を談林軒と號し、友人正友と心をあはせて、關東になつてゐた。今宗因をむかへると江戸十百韻を興行して、道をひろめた。卷頭につけた宗因の句に、

さればこゝに談林の木あり梅の花

談林派の名は、こゝにおこつた。

爾來世に梅翁と稱し、天和二年、七十八歲で世をさるまで、ひきつゞき江戸にあつて、同派の興隆につとめた。

門人に、右の松意、奥州岩本城主なる露沾公をはじめ、井原西鶴、椎本才麿、岡西惟中、田中山平などがあり、その他北條團水、田中常矩、小西來山など、みな同派中の錚々たるものであつた。

ぬり桶や遠山みする夜の花　露沾
長持に春かくれゆく更衣　西鶴
怠らずさいてのぼりし葵かな　才磨
とくちりてみる人かへせ山櫻　惟中
山姥がいたらぬ山や雲の峰　由平
御幸にも編笠ぬがぬ案山子かな　團水
姫瓜に三千の林檎顔色なし　常矩
夏川や草で足ふくときもあり　來山
雪をれや昔にかへる笠の音　松意

一一　談林派の主張

宗因が談林の一派をはじめるにいたつたのは、舊來の俳諧すなはち貞風にあきたりなくてのことであつた。それは、種々の點においてあきたりなかつた。第一貞風には、いろいろの

掟、格、すなはち法式があつて、一歩といへども、その法式以外にでることをゆるさなかつた。

その結果として、同派の人は、充分にそのいはんとほつするところをいひえなかつた。また題材に制限があつて、おほく花鳥風月の類をでなかつた。この弊は、和歌にあり、和歌連歌においていちじるしく、貞風の俳諧も、それをうけついで、つひにあらためることをえしなかつた。

自然幾度よんでも、たれがよんでも、おなじやうな句になつてしまひ、陳套に墮することをまぬがれなかつた。

したがつて、通俗な言語をもちひることを特色とする俳諧でありながら、いはゆる通俗な言語にも制限がつき、縱横自在といふわけにゆかなかつた。

守武や宗鑑が、和歌連歌から脫出して、俳諧連歌をはじめるにいたつた趣意は、和歌連歌における法式や制限をきらひ、感ずるところ、おもふところを無拘束に詠出せんがためであつた。

『それには、まづもつて用語をあらためにやならぬ。古人のもちひた古語は、今の人の思想を發表するに不便ぢや。日常の俗語をもちひてこそ、自由自在におもふこころをいひあらはすことができる。また俗語をもちひるとなれば、法式も制限もあつたものではなく、ますますもつて、自由に吟じ、自在に詠ずることができる。』といふ趣意から、俳諧連歌をはじめたのであつた。

約していへば、法式にも制限にもかゝはらないで、自由自在に心中のものを發表しぇんがために、俗語をもつてするところの俳諧をはじめたのであつた。

『今貞風の方で、法式にかゝはり、題材をかぎるのは、俳諧本來の趣意にそむく。それは、自由にとびうる俳諧連歌の翼をうばつて、和歌連歌の古巣へおひもどさうとするので、わらふべきの骨頂ぢや。』宗因は、かうおもつた。これ、新風首唱の根本理由で、いはゞ守武、宗鑑の趣旨への復古運動であつた。

であるから、宗因および同派の俳諧、發句は、在來のそれと、大分おもむきをことにしてゐた。そこには掟も格もなかつた。句に變化があつた。古人のいひおよばなかつた新味があつた。ひろく題材がとられてゐた。用語が宗鑑よりも、貞徳よりも、たれよりも通俗であつた。俗語がもつとも大膽に、もつとも徹底的に、もつともおもふ存分に驅使されてゐた。

その他、洒落、地口の類が、大分すくなくなつてゐたことなども、舊風に比して、いちぢるしい進歩であつた。

世間にも眼はあつた。舊來の俳諧の洒落や地口にあきあきしてゐた人たちは、驚異をもつてこの新興の俳諧をむかへ、

『いかにも大膽だ、奔放だ。づばぬけてる。おもしろい。』といつた調子。なかには貞門の俳人をもつてして、それへはしるものさへあつた。

これ、貞風の一大事であつた。同派の守舊家たちは、

『新風は、この道の邪宗門だ。百韻中に、字あまりの句が四十九もある。その他の句とても大惡無道、餓鬼つくり、無理留、無理放埒なものばかりだ。第一掟を無視するとはなんだ。和歌、連歌、みんな掟があるぢやないか。掟のない俳諧や發句は、たゞの囈語にすぎない。』

と、口をきはめて談林派をのゝしつた。

これに對して、談林派のものも默してはゐず、

『掟々と、そんなに掟がすきなら、和歌連歌へゆくがいゝ。新風が俳諧でないなどと、それなら舊風におもしろい句があるか。ふるめかしいのばかりぢやないか。駄洒落を十七字にしたまでの俳諧には、三文の價値もあるまいよ。』とやりかへした。かくて新舊兩派のあひだには、舌端火を吐く底の怒罵惡罵が、ひさしきにわたつて交換された。

宗因が、大阪天滿の向榮庵に、はじめて談林の大旆をおしたてたのは、明暦二年のことで芭蕉は、そのとき十二歳であつた。それから十二三年たつて、京都へのぼつた。談林派は、そのころ、すでに相當勢力をはつてゐた。けれど當時の芭蕉には、季吟の門下にあつて、貞風を學ぶのほか、他流をかへりみるの餘裕がなかつた。

芭蕉が、談林派に目をつけるやうになつたのは、それより數年ののちであつた。數年ののちの芭蕉は、ほゞ自分の性格に目ざめてゐた。貞風の洒落や地口にもほとほとあきてゐた。それが自分の性格に適しないことをしつてゐた。さては、談林風に着目するにいたつたのであつた。

談林風とても、芭蕉の充分に滿足しうるものではなかつた。洒落や地口は、大分すくなくなつてゐたけれど、これまた、滑稽を旨とするものには相違なかつた。貞風同樣、そこにはさびもしをりもなかつた。そのころの芭蕉には、さびやしをりについてのたしかな觀念、しみじみとした要求はなかつたけれど、とにかくそこにおちつくべき性格の人とて、さうした觀念、さうした要求が、その腦裡に暗流冥動はしてゐたのであつた。

たゞ談林派の俳諧が、法式を無視し、題材をひろきにとつて、縱横自在に吟じさり吟じきたる放膽的態度、たゞその點がうれしかつた。その點において、すくなからず、共鳴させられた。

そしておもつた、

『自分のおちつき場所は、貞風にもない。談林にもない。たゞし談林の宗因老にならつて、掟や格に拘束されず、題材を無制限にとつて、自由自在にやつてゆくあひだから、一新天地がひらかれるかもしれぬ。そしてそこにこそ、自分のおちつき場所があるかもしれぬ。それについては、まづもつて、貞風の古巣を脱しなければならぬ。』と。かくて芭蕉は、京都をさ

るべく決心した。

一二　江戸にくだる

寛文十二年、芭蕉は、つひに京都をさつて、江戸にくだつた。途中小夜の山中での吟に、

命なりわづかの笠の下すゞみ

京都からすぐに江戸へくだつたのではなく、まへにかゝげた「貝おほひ」の序文などから察して、その以前、すでに伊賀へかへつてゐたこのことでもあつたが、とにかく寛文十二年に江戸へくだつたには相違なく、ときに二十九歳であつた。

そのころの芭蕉は、貞風の俳人として、一廉の手腕をそなへてゐた。のちに芭蕉の門人になつた彦根の許六は、つゞに京都の田中常矩にしたがつて、談林の俳諧をまなんでゐたが、芭蕉の句をみて、つくづく感心し、

『この人、凡器ぢやない。その實力は、わが師以上と察せられる。他日名人ともなるぢやらう。一度あつて、俳諧の話がきゝたい。』とさへおもつたこのことで、十目のみるところがこゝにあつた。

であるから、芭蕉が世の常の俳人であつたならば、自分の性格にあふあはないなどは、問題にせず、そのまゝ京都にとゞまり、俳諧によつて衣食の道をたてるのに、何の困難もないのであつた。

けれど芭蕉は、世をのがれるかんがへで、故郷を脱走した人であつた。季吟の門に俳諧をまなんだのも、點料とりを目的とする俳諧師にならうがためではなくて、俳諧にかくれて、世累を脱しやうとしたのであつた。佛門にのがれる心もちで、俳道にのがれたのであつた。衣食、金錢の問題は、ほとんど芭蕉の念頭になかつた。たゞ俳諧にかくれ家をえやうとしたまでであつた。かうした人に、自分の性格にあはない俳諧、したがつて自分の滿足しえない俳諧によつて、門人からの點料をむさぼり、宗匠顔して世をわたるなどは、到底できうべくもなかつた。

といつて、念頭衣食を問題としないわけにはゆかなかつた。

『この上は、江戸へでて、衣食の道をたてると同時に、何ら拘束のない自由の天地にあつて

おもふ存分、工夫をつまう。自分の安住しうる俳諧の新境地も、そのあひだから展開してくるかもしれぬ。江戸はひろい。かつそこには杉山氏がをる、小澤氏がをる。一身をやしなふぐらゐは、なんとしてもできるぢやらう。』芭蕉は、かうおもつた。さては江戸へとこゝろざしたのであつた。

右の「杉山氏」は、京橋小田原町の魚商杉山市兵衛。幕府のお納屋をつとめ、その家すこぶるとんでゐた。俳諧をこのみ、季吟の門にまなんで、杉風と號した。

「小澤氏」は、日本橋本舟町の名主小澤友次郎。これまた季吟の門下で、卜尺と號した。かくて杉風も卜尺も、芭蕉の同門であつた。しかも俳諧については、芭蕉に益せらるゝところがおほく、のちには、二人とも芭蕉の門下にはいつたくらゐで、つとに敬意をはらつてゐた。それらの關係から、江戸不案内の芭蕉は、二人をあてに江戸へくだつた。

一三　水道工事の書役

江戸へつくと、芭蕉は、二人のいづれかで草鞋をといた。そしてその志をものがたつた。

『あなたの俳諧執心には、いつもながら感心の外ありません。手前なども、おほいに勉強したいかんがへはあるのですが、俗用におはれて、つひおこたりがちなつてしまひます。つまり志がうすいのでせうよ。』といふのは、杉風であつた。

『しかしあなたが、今後當地におとゞまりくださるとあれば、わたしどもにとつて、こんな好都合はありません。おほいに勉強ができるわけです。』といふのは、卜尺であつた。

『まつたくです……そこで就職口の件ですが、昨今小石川に水道工事がはじまつてゐます。あれへゆけば、何か仕事はあるでせう。小澤さん、役人衆のうちに、あなたのお知合はありませんか。』

『ありますよ……なるほど水道工事はいゝでせう。早速たづねてみませう。それにしても、いづれ來春からのことですね。年内は、杉山さんのところなり、手前どもなりに、ゆるゆるおやすみなさるがよろしい。』との言葉に、芭蕉は、あつくその好意を謝し、當分二人の世話になることにした。

卜尺は、早速役人中のしるものにかたつて、採用方をこうた。その結果、芭蕉は、翌延寶

元年の春から、水道工事の書役にめしだされることになつた。

けれど芭蕉は、風人であつた。趣味にいきる人であつた。役人として、簿書堆裏に身をおき、刀筆を弄してやみうるには、あまりに趣味性がかつてゐた。役人の仕事は、貞風の俳諧が、その性格に適しない以上に適しなかつた。

役所へでて、事務をとりつゝあるあひだにも、頭は、やゝもすると俳諧の方へむかつていつた。一句うかびさうになると、それに全心をとられてしまふ。そして苦心慘澹ののち、やつと自分の滿足しうる十七文字につくりあげて、

『まづよし！』と安心し、ほつとする。そんな風であつた。

まことに芭蕉は、ねる人であつた。あくまであぢはつて、想をねり、あくまで工夫して、句をねり、ねりねつて、しかるのち甘心する人であつた。談林派の西鶴が、一日、住吉の社頭において、獨吟二萬三千句をはき、爾來二萬堂とか二萬翁とか稱せられたことは、有名な話になつてゐた。貞風、談林とも、速吟多作をもつてあひほこるのが、當時の俳人一般の風であつた。が、芭蕉にはそれができなかつた。

『發句をつくるのは、駄菓子をつくるのとわけがちがふ。』芭蕉は、かうおもつてゐた。

『ふかくあぢはひ、切にねる。このあひだにこそ、發句のおもむきはある。』かうかんがへてゐた。

かくて役人としての芭蕉は、はなはだ成績がよくなかつた。能率があがらなかつた。自然上役のうけもよくなかつた。芭蕉も、上役の御機嫌をうかゞつたり、表面だけ勤勉をよそほつたりすることを、いさぎよしとしなかつた。むしろそんなまねはできなかつた。

結局一年とつゞかないうちに、役人をやめることになつてしまつた。これにも種々の噂があつたなかに、

『放蕩の結果、官金をつかひこみ、免職になつたのだ。』などは、言語同斷の妄說で、芭蕉の性格が役人にむかなかつたことの外に原因はなかつた。しかもそれは、芭蕉みづから職をすてたものらしかつた。

ちなみに、水道工事に出勤中、芭蕉は、しばしば關口の龍隱庵にあそんで、早稻田の風景を賞し、句作にふけつた。他日芭蕉の名がたかくなるにつれて、この地は、芭蕉緣故の一名

區となつた。後世にいたり、白蓮園宗瑞、馬光などいふ俳人は、この舊蹟の堙滅に歸せんことをなげき、附近の光景が、芭蕉の墓のある江州瀨田の義仲寺邊に彷彿してゐることから、一つの塚をきづき、

五月雨にかくれぬものよ瀨田の橋

とかいた芭蕉の短冊をうづめ、號して「五月雨塚」といつた。

一四　殘酷なる生活問題

芭蕉は、思想の人であつた、性格の人であつた。けれどキリストのいはゆる「人は、パンのみにていくるものであらず。」で、この人またパンの問題、生活問題を解決しなければならなかつた。東下早々、杉風らにはかつて、水道工事に就職したのも、それがためであつた。

貞風の俳諧にあきたらず、談林派のそれにかんがみるところがあつて、獨自の新境地をひらくべく江戸へでた芭蕉にとつて、右の就職は、もつてこいの好方便であつた。微々たる書役ながら、生活問題は、それによつて解決せられ、よつてもつて衣食をえ、安心して俳諧修

行にしたがふことができた。

いかゞせん、その人、到底役人ではなかつた。出勤一年にみたずして、職をうしなつた。かくて芭蕉は、ふたゝび生活問題に當面し、ふたゝびこれが解決に苦心するの餘儀なきにいたつた。

生活問題、芭蕉にとつて、これは、くだらない問題であつて、また重大な問題であつた。この重大な問題も、芭蕉が俗人ならば、これを解決すること、さまで困難ではなかつた。なんとなれば、欲心のさかんな、打算にあきらかな、黄金萬能宗徒なる俗人は、これを解決するのに、ちやうど都合よくできてゐるから。

けれど芭蕉は、俗人でなかつた。したがつて、これ容易ならぬ問題であつた。かれの頭はたえず俳諧にむかつてゐた。無常を感じて世をのがれたほどであるから、「人生こは何ぞ?」といつたやうな問題も、やゝもすればかれの全身をおそつた。さうした中から、生活問題を解決するために、心をかたむけ、力をつくすといふことは、談決して容易ではなかつた。

一旦は解決がついた。杉風や卜尺の盡力によつて、一旦はこの難問題を解決し、役人にな

つた。けれどその解決された狀態を、ながく持續することができなかつた。たちまち失脚して、またまた生活問題にくるしみ、衣食に窮しなければならなかつた。たえず俳諧に向ひ、人生問題におもひなやんでゐる頭をもつて、心にもなく俗事にしたがひ、とぼしいながらも衣食をえてゆくといふことは、ほとんど二重生活にちかく、はなはだ困難なことであつた。

かくて、

『失脚また失脚、困窮また困窮、心をしらぬ俗人にあなどられながら、一生を終る。これが自分の運命ぢや。』芭蕉自身、こんなことをおもひなどした。

これ畢竟、生活問題を解決し、安心のできる地をえるためには、もつとも都合のわるい障碍物、じやまものを、頭の中、性格の中にもつてゐたのであつた。

芭蕉は、ひそかに、その障碍物を名づけて「風雅の魔心」といつた。

『人は往々、その頭の中に、何ものかをおもひまうけ、そのもののためにわづらはされる。そのもの、あるひは永續的であり、あるひは一時的であり、あるひは先天的であり、あるひは後天的であつて、一概にはいはれぬが、それがその人のわづらひとなり、じやまものとなるにいたつては、みなおなじことぢや。宗教家には、かならず悪魔の談があるが、この心中のじやまものが、きはめて有力で、どうすることもできないときには、一種の心理作用として、これを客觀視し、外物視するやうになる。悪魔といふのは、外物視された心中のじやまものに外ならぬ。今自分の俳諧は、自分の世わたりのため、生活問題解決のためには、また一個のじやまものぢや。しかもその有力なことは、自分ながらどうすることもできぬ。ほとんど一個の悪魔にちかい。「風雅の魔心」とでもよぶべきぢやらう。』みづからこんな風に解釋したのであつた。

後年「栖去の辯」をつくつて、

風雅もよしやこれまでにして、口をとぢんとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや、風雅の魔心なるべし。

といつたのも、やはりこの心もちであつた。

まことに役所での芭蕉は、その身、簿書堆裏にありながら、その心は常に句境をさまよつてゐた。事務の手につかないことさへあつた。俗人の上役に、風人の心もちの解せやうわけ

はなければ、目して横着とし、おこたりごし、不熱心とし、いまはしげに芭蕉をみた。芭蕉は、それがつらかつた。つらいにつけて、

『せめて役所にゐる中だけは、この道をわすれたい。』とおもつた。何とかわすれやうとこゝろみた。

けれど、そのこゝろみは、むだであつた。わすれんとしてわすられる道ではなかつた。わすれやうとすればするほど、風情が胸中をさそつて、眼前に物がちらめくといふ風で、どうすることもできなかつた。まことにそれは、じやまものであつた。宗教家のいふ悪魔であつた。かれのいはゆる風雅の魔心であつた。

かくてかれは、到頭その職をうしなつた。衣食の道をうしなつた。かれは、ふたゝび生活問題を解決しなければならなくなつた。この問題をもつて、この人をくるしめるのは、一悲惨事ながら、いかゞせん、かれもバンなくしてはいきられない「人」であつた。けふをかぎりに役人生活をしりぞいたときには、さすがにかんがへざるをえなかつた。

『自分もいきなければならぬ。なんとしていきたものぢやらう？　自分は、性格からの窮民

ぢや。こんな風で、世わたりができるかしら？　ゆくゆくはうゑてしぬのぢやないかしら？　いや、それも運命ならしかたはない。』さうおもつて目をあげたとき、日頃みなれた早稲田あたりの光景が、特にさびしいものにみられた。

一五　俳諧師として

芭蕉は、今度の生活問題、身のふりかた問題をひつさげて、またも杉風、卜尺二人をこうた。芭蕉の顔色は、さすがに蒼然としてゐた。二人は、その顔色をみ、そのいふところをつくづくときゝをはつて、

『なるほど、あなたに役人のつとめはできますまい。よされたのは、もつともです。』こうなづき、

『しかし今後のことて、何もむづかしい問題ぢやないでせう。あなたの本領の俳諧でおたちなさい。われわれも、およばずながら盡力します。』このみ、事もなげにいつてのけた。

芭蕉は、もともと俳諧師になるつもりでゐた。たゞかれは眞面目であつた。貞風にもあき

たらず、談林にも不滿があり、しかも自分の俳諧にもおちつきかねる今日、はやくも他人の師となり、宗匠顏をすることは、芭蕉のはなはだこのまないところで、さればこそ京都をさつたのであつた。役人にもなつたのであつた。

が、今となつては、やむをえぬ。生活問題を解決する道は、世間に多々あつた。けれど芭蕉の性格、趣味と一致して、よくその全力をそゝぎうるのは、むしろ、その全力をそゝがずにゐられないのは、俳諧の一途あるのみであつた。他にどんな道があらうとも、心中のじやまもの、風雅の魔心は、かならずかれをさまたげて、ふたゝび失脚させるにきまつてゐた。殷鑑とほからず、水道役人の際にあつた。

であるから、芭蕉自身も、內心ひそかに、

『今後は、俳諧でたつのほかはない。』とおもつてゐた。をりから杉風等のすゝめに會して、芭蕉の意は、すなはち決し、爾後この道をもつて、世にたつことになつた。

きびしくいへば、芭蕉の俳諧師生活は、このときにはじまつたのであつた。從來の芭蕉は修行時代にあつて、人ををしへるにはいたらなかつた。今後は、みづから修行し、工夫しながら、人の師となるのであるから、それは、芭蕉の一代にあつて、まさしく劃時代的大事件であつた。

俳諧先生決して營利事業ではなかつたが、門人その他からの謝儀、點料は、もつて一家をさゝふるにはたつた。であるから、のちの俳人清水超波が、これも風雅の魔心から、舊來の味噌商をいとつて、にはかに剃髮したとき、これも俳人なる靑蛾は、ふかく同情するなかからも、

『恒產のないものは、恒心がない。なにか收入の道をたてなきやならない。貴公の趣味からかんがへるのに、俳諧師がよからう。』といつて、すゝめて其角の弟子の貞佐へ入門させた。

また俳諧師かならずしも金錢問題に無頓着ではなかつた。貞德門下の宗畔は、師の點料が沈香一兩のさだめであるのをみて、

『以前連歌師の紹巴は、點料二十四字をうけられたさうです。師も、今後は、沈軸を銀軸におあらためなさいまし。』とすゝめた。よつて貞德は、點料銀一兩といふことに改定した。

すると貞德門下の立圃は、その例をおつて、銀一兩をとつた。宗畔は、またまた師にまみ

えて、そのよしをかたり、

『立圃でさへそのとほりです。今一錢目だけおましなさるがよろしい。』とすゝめた。貞德はもつともとして、以後五錢目とさだめた。

そんな風であつたから、心がけ次第、俳諧によつて産をおこすこともできた。たとへば、其角の門人松木淡々は、京へのぼつて、祇園のあたりにすみ、貴顯もおよばぬ豪奢をきはめた。建部凌岱も、一時は富榮をいたした。

もつとも、そんなのは稀有の例で、當時の世評にも、

『近來俳諧で金持になつたのは、淡々と凌岱とが一番だ。』とあつたが、とにかく俳諧をもつてしても、一家五口をやしなふにはたつた。俳諧師は貧乏人と、そんな風にきまつてゐるわけではなかつた。

かくて芭蕉が、俳諧師としてたつにいたつたのは、生活問題解決の方法として、もつとも策のえたものであつた。

一六　まづしき生活

けれど芭蕉は、もともと金錢に淡泊な人であつた。名利一點ばりの世俗にまじはることをいとふがために、佛門にのがれる心得で、俳諧にのがれたくらゐで、點料や謝儀を問題にするなどは、そのおもひもよらないところであつた。

たゞに問題としなかつたのみではなく、その額のおほいのを、俳諧の風儀にかなはぬものとした。後年ある人が、芭蕉の添削をこふのに、謝儀をあつくしておくると、芭蕉は、その持說にしたがつて、

『風儀にかなはぬ。』とのみ、おしかへしてしまつた。その人は、はなはだ心ういことにおもひ、かさねて、

詩にしれ翁さびけん芭蕉洞
こゝに水仙の薫さらなり
天命と掃除の咳のおとづれて

歌仙一軸をよせた。芭蕉は、その篤志に感心して、

こゝに水仙のいとわかきありと添削し、その奥へ、

いよの國松山の嵐、ばせをの洞の枯葉をふいて、その聲歌仙を吟ず。あゝ蓼々刁々たる風の音、玉をならし、金鐵ひゞく。あるひはつよく、あるひはやはらかにふいて、かつ人をしてなかしめ、人の心をつく。萬竅怒號、ひゞきかはりて、句ごとの意味、おのおの別なり。たゞこれ天籟自然の作者、ばせを葉やぶれて風飄々。

とかきそへて返送した。

そんな風であつたから、芭蕉の赤貧は、爾後七八年にわたつて、依然としに舊のごとくであつた。一生涯を通じて、貧乏生活をしたなかにも、延寶二年、三十一歳、はじめて俳諧師としてたつてから、天和元年、三十八歳、居を深川に卜するまでの貧生活は、もつともはなはだしいものがあつて、居所さへもさだまらず、あるときは小石川に、あるときは本郷邊にあるときは神田駿河臺に、あるときは本所中の郷に、あるときは日本橋濱町に、江戸のうち

を一所不住に轉々しあるいた。

秋きにけり耳をたづねて枕の風

これは延寶五年の句。

雪の朝ひとり乾鱈をかみえたり

これはおなじく八年の句。いづれも芭蕉自身のわびしい境遇を詠じたのであつた。

が、この八九年間のわびしい貧生活も、芭蕉の思想、したがつて芭蕉の俳諧にとつて、むだではなかつた。かれが、後年さびを生命とし、しをりを本意とする正風の一派をひらくにいたつたのは、勿論かれ自身の天性、性格、人生觀、趣味に由來することではあつたが、この八九年間の貧生活が、その天性乃至趣味に力をそへ、これを助長するの因縁となつたには相違なかつた。それはまさしく、正風建立のための貧生活ともみるべきであつた。

のちの芭蕉を論ずるものが、

『およそ富貴になれ、榮華にふけるもの、あるひはそれまでにいたらなくても、日々を何不足なくすごしてゐるものに、徹底した人生觀はありえない。かれの思想は、大概輕浮だ、膚

淺だ。ひらたくいへば、うかうかしてゐる。したがつて、さびのしをりのといつたところで、その眞のあぢはひはわからない。江戸の俳諧が、芭蕉の死後、其角になつてやゝ變じ、爾後時代の降下につれて、墮落また墮落し、つひにはさびもしをりもない川柳や狂句を生ずるにいたつたのをみても、察することができる。平生華美にくらした江戸人は、その思想が輕浮で、しみじみとした芭蕉の俳諧を味解するにたへなかつたのだ。生活が人の思想界におよぼす影響は、存外におほきい。貧乏といふことも、俳人もしくは平生人生問題に潛心する人にとつては、決してむだぢやない。芭蕉なども、ひさしい間の貧乏をへなかつたら、正風をおこさずにをはつたかもしれない。』とかんがへたのは、けだし至當の見解であつた。

八九年の貧生活中、もつともおほく芭蕉の力となつたものは、やはり杉風と卜尺との二人であつた。二人は、もともと芭蕉の友人ながら、俳諧においては、芭蕉に益せらるゝことがおほく、かつ若干年少でもあつた關係から、いつしか芭蕉を師とよぶやうになり、師につかへる心もちで、物質的にも、精神的にも、ために種々つくすところがあつた。

今一人、友人でもあり、弟子でもあるものに、山口素堂があつた。これまた季吟門下の士で、常に和漢の書を讀み、詩文をよくし、かつ俳道の達者としてしられてゐた。年齢は、一つ二つ長じてゐたが、なかば芭蕉に師事した。これまた相當の金持で、俳諧について、芭蕉に益せられたかはりには、生活について、芭蕉を益することがおほかつた。

門人も、其角、嵐雪をはじめ、おひおひにふえていつた。しかもそれらの門人は、芭蕉の俳諧以上にその人格に敬服して、さながら子の親をおもふごとくに芭蕉をおもひ、師をしてなるべく生活の苦勞からのがれしめやうとした。たゞ恬淡寡慾な芭蕉は、過分の謝儀、おくりものの類は一切うけず、依然として貧生活をつゞけた。

こゝにおいて、門人のうちには、

『師は、このんで貧乏する人だから……』と嘆ずるものもあつたが、この評は、たしかにあたつてゐた。

一七　自分一己の俳諧

さうした貧生活の中からも、芭蕉は、獨自の新句境をひらき、自分の滿足しうる新俳諧に

追せんがために、たえず修行し、たえず工夫した。

滑稽本位から、洒落、地口にさへおちやうとした貞門一派の俳諧は、芭蕉のもつとも不快とするところであつた。

『談林とても、滑稽本位の俳諧ぢやが、種々の點において、貞風よりはまさつてをる。二つどりには、自分はむしろ談林をとる。』そんなかんがへでゐた。すなはち談林派にかんがみつゝ、別に自家の俳諧に苦心したのであつた。

江戸に松意がゐて、しきりに談林風をとなへたことは、前にしるした。松意のまねきによつて、宗因が江戸へでたのは、多分延寶中のことで、芭蕉におくること二三年であつた。こゝにいたつて、同派のいきほひは、日をおうてさかんに、いまだいくばくならずして、江戸の全俳壇を風靡しさらうとした。

これ一つは、宗因の爲人にもよつた。その句にもうかゞはれるとほり、宗因は、きはめて豪爽な、覇氣のある人であつた。ことにその奇才は、よく一世を驚倒せしむるにたつた。

いつの年か、芭蕉は、人にさそはれて、めづらしくも芝居見物にいつた。劇場は市村座、

當時日本橋の葺屋町にあつた。ところへ門人をつれた宗因がきあはせて、芭蕉は、はじめてこの先輩と對面した。

時に宗因の門人某の句案に、

子はまさりけり竹之丞

とつけ、上の五文字をおきかねた。竹之丞は、その芝居の座元俳優であつた。門人は、『先生、何とおいたものでせう?』思案にあまつて、宗因にたづねた。

『おやおやおやとおけばよい。』宗因は、言下にをしへた。芭蕉は、つくづく感心し、後日門人にはなして、その奇才をほめたてた。

芭蕉ですら感心した。いはんや一般の人をやで、江戸の俳人らが、あらそつてこの人の傘下にあつまつたこと、それに何の不思議はなかつた。

芭蕉も、この宗因には、かなり敬服してゐた。「去來抄」のつたふるところ、かつて門人にかたつて、

宗因なくば、われわれの俳諧は、今もつて貞德の涎をねぶるべし。宗因は、この道の中

興開山なり。

とさへいつた。

またあるときの歌仙に、

梅の風俳諧國にさかんなり　信章

こちとらづれもこの時の春　桃青

素堂は、はじめ「信章」と號してゐた。芭蕉が「桃青」と號したのは、出府早々、唐の詩人「李白」に對して、さうした二字をえらんだのであつた。

右の二句は、いづれも談林派を讃美したのであつた。宗因を世に梅翁と稱した次第は、前にしるした。「梅の風」は、談林風を意味した。當時の芭蕉は、他の諸俳人同樣、全然宗因の傘下に歸したもののやうにさへおもはれたが、その實は、談林派にかんがみつゝ、獨自一個の新俳諧に達せんとする、これがその眞意であつた。

一八　習慣の子

さばれ芭蕉は、その頃、どんな句をよんでゐたか。延寶二年には、

桂男すますなりけり雨の月

同三年には、

町醫者や屋敷がたより駒むかへ

同四年には、

天秤や京江戸かけて千代の春

この梅に牛も初音となきつべし

たかうなや雫もよゝの笹の露

ながむるや江戸にはまれな山の月

けふの今宵ねるときもなき月見かな

杯の下ゆく水や朽木盆

武藏野や一寸ほどな鹿の聲

みるにわれもをれるばかりぞ女郎花

同五年には、

大比叡やしをひきすてし一霞

猫の妻籠のくづれよりかよひけり

またぬのに菜うりはきたが時鳥

榾よりあだにおちぱり蟬の殼

今宵の月さぎだせ人見出雲守

唐黍やのきばの萩のとりちがへ

なりにけりなりにけりまで年の暮

霜をきて風をしきねの捨子かな

ゆく雲や犬のかけいばりむら時雨

あらなんともなや昨日はすぎて河豚の汁

同六年には、

あゝ春々おほいなるかな春と云々

内裏雛人形天皇の御字とかや

けにや月間口千金のとほり町

名月のいづるや五十一個條

一時雨礫やふりて小石川

同七年には、

阿蘭陀も花にきにけり馬に鞍

蒼海の浪酒くさしけふの月

おすれ草菜飯につまん年の暮

などの句があり、その他、

秋や須磨々々や秋しる麥日和

張拔の猫もしるべしけさの秋

八朔や天の橋立たばねのし

愚案ずるに冥途もかくや秋の暮

鳥の文かた野の雁よかただより　信章

琵琶の湖雨よ疎顔が松の律　信徳

これらをみてもわかるごとほり、毎句、貞風の弊だけは脱してたが、そのかはり、談林臭味のもの、すなはち奇を弄し、人をして破顔一笑せしむる點において、滑稽本位ともいふべきものが、多々混じてゐた。後年の句にみるやうな、さびとかしをりとかいふおもむきは、どこにも發見することかできなかつた。一括して「談林風の句」といふことができた。

師の芭蕉すでにしかり。門人にいたつては、ことにさうであつた。それは、全然談林化してゐた。その句に、

さぞや都淨瑠璃小唄はこゝの花　松風

物の名のたこや故郷のいかのほり　巖泉

たれかはまつ蠅はきたりて上戸をまつ　螺子

蠅ごなつて晝寢の心栩々然たり

分限者になりたくば秋の夕暮をもすてよ

霜朝の嵐やつゝむ生姜味噌　治助

遊化老人席をのべてのち上戸をまつ　卜尺

右のうち、螺子は、のち「其角」ごあらため、治助は、「嵐雪」と號した人で、素堂以下のすべてが、當時蕉門の高足であつた。

かくして、そのころの芭蕉は、その門下ごともに、大體において、談林派中のものとみらるべきであつたが、それは、決して滑稽本位の談林俳諧に滿足したのではなかつた。いかゞせん、人は、つねに習慣の子である。境遇の奴である。そのはじめに期したごほりの、新俳諧をはじめるといふことは、到底一朝一夕の業ではなかつた。

一九　滑稽本位をいとふ

かくて芭蕉は、貞風の弊を脱して、さらに八九分どほりも談林化し、多年その風の俳諧をつくつてゐたが、同派に對する不滿の情は、年々に增長し、はてはたへられなくなつた。

それは、前からいつてきたとほり、その滑稽本位の俳諧であることにたへられないのであ

つた。滑稽俳諧、したがつてまた一種の遊戯文學に外ならぬことに、あきたりないのであつた。無常の感におそはれて世をのがれ、やゝもすれば人生問題がかんがへられるといふ風の沈痛な、嚴肅な性格の持主なる芭蕉としては、當然のことで、遊戯文字のために全力をそゝぐなどは、あまりに馬鹿げたことであつた。

『もつと意味のある俳諧がありさうなものぢや。』かうおもはれてならなかつた。かうおもひながら、周圍をかへりみた。けれどそんな俳諧は、どこにも發見されなかつた。

『他人によつてあたへられる俳諧は、所詮他人の俳諧ぢや。自分の俳諧、自分の滿足しうる俳諧、むしろ自分のやすんじうる俳諧は、自分でつくるの外はない。』かうおもつて、ますます新俳諧建立のねがひを痛切にした。

勿論それは、みづからやすんずるといふのほか、他に野心はなかつた。

『新俳諧を建立するなどいへば、何か野心家の仕事でもあるやうにおもはれやう。何によらず、新機軸をだして、名をあげやうとか、利をむさぼらうとかするのは、世の野心家の常ぢや。けれど自分は、たゞ自分一己の俳諧をえて、みづからやすんじたいまでで、自分の念頭

に、さうした野心の毛頭ないことを、この際、特に斷言したい。』芭蕉は、みづからかへりみていつた。

宗因も、みづから滿足しうる俳諧をこのぞんで、誹林の一派をひらいた。貞門の法式や制限にあきたりないところから、あらたに縱横自在の句風をはじめた。これ、貞風の舊風を脱したのであつたが、その滑稽を本位としたこころは、依然として舊風中のものであつた。それとしりつゝ、そしてそれに不滿を感じつゝ、從來その俳諧にあそんでゐた芭蕉は、今や不滿にたへられなくなると、

『誹林が、何あたらしからう。貞門、誹林をあはせて、所詮は舊風をでぬものぢや。』かうつぶやかざるをえなかつた。

またおもつた、

『他のすべての點においては、みんごと貞風の弊を看破して、はなばなしくこの道の改革者となつた宗因が、滑稽本位の一事において、舊風を墨守してゐるのは、なぜぢやらう？　縱横自在を特色としながら、この點にかぎつて、縱横自在でないのは、をかしいことぢや。自

分は、かつておもつたことがある、宗因の縱横自在をおしとほしていつたら、その奥に俳諧のあたらしい道があるかもしれぬと。この信仰は、今もかはらぬが、滑稽本位から縱横自在になるこそ、今の自分にとつて、もつとも肝要な縱横自在ぢや。滑稽の藩籬を脱しないかぎり、自分の縱横自在は徹底せぬ。したがつて、あたらしい俳諧もありはせぬ。』と。かくて芭蕉は、貞風の諸弊害をまぬがれるについては、談林の宗因を範としつゝも、なほかつ談林の滑稽本位をあらためるべく努力した。

芭蕉が、こんなかんがへになつたのは、延寶七八年、三十六七歳のころにあつた。かくて芭蕉の句風は、同八年の秋から冬へかけて、いちじるしい變化をとげた。去來が、

先師も、次韻のころまでは、たゞ法式をやぶりたまふといへども、のちはもとにかへりたまふ。

とつたへたのは、貞風に對する努力までの說で、芭蕉には別に談林派に對する努力があつた。「次韻」は、延寶八年、芭蕉三十七歳の時、世にでたのであり、出府後の數年間をそんな風ですごし、すでに貞風の諸法式、諸制限を打破して、談林派の縱横自在をえると、ついで

同派の弊事からも脫却して、新俳諧建立のねがひをはたさうとしたのであつた。

二〇　所詮は「人」

『何として談林の滑稽本位を脫したものぢやらう？　貞風の洒落や地口は、言語同斷、勿論とるにたらぬとして、自分は、なほ談林の滑稽本位にもあきたらぬといふ。では、何を本位としたらよいか。談林以上、もつと縱横自在に……貞風、談林に通ずる滑稽本位からも縱横自在にといふについては、何か滑稽にかはるべきものがなくてはなるまい。それは、一體何ぢやらう？』芭蕉は、多年かうした問題になやまされた。

後になつてみると、これは、むづかしい問題ではなかつた。

『花鳥風月は勿論、天地間にありとあらゆる事々物々は、みな俳諧の題材ぢや。たゞ人によつて、それをみる眼がちがふ、見方がちがふ。あるひは滑稽にみ、あるひはまじめにみ、あるひはにぎやかにみ、あるひはさびしくみ、あるひはかるくみ、あるひはおもくみ、あるひはふかくみ、あるひはあさくみるなど、十人十色、千差萬別で、物はおなじものながら、見

方はそれぞれ人によつてちがふ。「見方」がちがふのは、「人」がちがふからぢや。いかにみるかは、人による。くはしくは、思想による。性格による。人格による。人ごとに、そのみるがまゝを十七文字につくれば、その人相應の句があるはずぢや。その句は、まさしくその人の句ぢや。いはゆる獨自一己の句ぢや。獨自の思想をもつてみ、乃至、獨自の人格をもつてみ、その見るがまゝを吟出すればよい。すれば、自然在來の滑稽本位からまぬがれ、獨自一己の句、みづからやすんじうるやうな新俳諧をはじめることができる。新俳諧の建立といふこと、かならずしも困難ではない。芭蕉は、こゝに氣がついた。

けれど、こゝに氣がつくまでには、相當の時日と過程とを要した。多年のあひだ、ある程度までは氣づきながら、ふかくは氣づかなかつた。充分には氣づかなかつた。

まことに貞風の俳諧、談林の俳諧、芭蕉の俳諧、その他いづれの俳諧も、それが文學であり、藝術である以上、所詮は「人」に歸すべきであつた。人の思想に歸し、人格に歸すべきであつた。無思想、沒人格、たゞ常識一偏の頭で、言句の末だけを縱橫自在にやつてみたところで、滑稽に墮するの外はなかつた。洒落、地口が、結局の場所であつた。貞門や談林派の

俳諧のつまらないのは、要するにこのことに原因した。芭蕉が、あきたりなく感じながら、貞風や談林にかぶれて、多年をすごしたことは、まことにあたらしのきはみであつた。それといふのが、かの一事、獨自の思想、人格にしたがつて事物をみ、そのみるがまゝを句にするといふことに氣づかつたのであつた。

もし氣づいたならば、とくにも獨自一己の句があり、新俳諧をはじめたのであつた。何となれば、かれは、元來、思想の人であり、乃至、人格の人であつたから。

まことかれは、無常を感ずるのあまり、世を俳諧にのがれたほどの人とて、常に人生といふことをかんがへてゐた。それに關連して、精神的書類、たとへば佛典、老莊などを耽讀した。また古人の詩文を涉獵して、そのあるものに私淑した。

かくてかれの思想は、相當の深味をもつてゐた。他の俳人が、淺薄な頭でゐるのとは、おのづから撰をことにしてゐた。

かれの號「桃青」が、「李白」におもひあはせたのであつたことは、まへにしるした。芭蕉が俳諧にのがれたに對して、李白は、時酒にのがれた。かれもこれも、世外の人なるにおい

て、よくにてゐた。世事を遺落して、縱酒昏酣、何物何事にもかゝはらなかつた李白の超脫ぶりは、芭蕉のはなはだおもしろしとするところであつた。もつとも、みづから日東の李白をもつて任ずるなどの子供らしいかんがへはなかつた。

延寶八年の秋、其角の撰した「田舍三句合」がでた。卷首にかゝゲた嵐亭治助後の嵐雪の序に、

桃翁、栩々齋にゐまして、ために俳諧無盡藏をとく。東坡が風情、杜子が洒落、山谷が氣色よりはじめて、その體幽になだらかなり。練馬の山の花の下、渭北の春の霞をおもひ、葛西の浦の月の前、ふたゝび江東の雲をみると。螺子、この語にはずんで、農夫と野人とを左右にわかち、詩の體五十句をつゞる。章のふつゝかに、語路の巷のまがりまがれるをもつて、田舍とはなづけたるなるべし。なほもつて、これに翁の判をえたり。判詞、莊周が腹中をのんで、希逸が辯も、口にふたす。とほくきく大江の千里は、百首の詠を詩の囿にならひ、近所の其角は、俳諧に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なることをしる。しるといへば、われこれをしるにこたり。しらずしてこゝに筆をとる。またこれしらざるなり。

「桃翁」は、桃青翁すなはち芭蕉であつた。「栩々齋」は、そのあるときの軒の名で、「栩々」の二字は、莊子に、

昔者莊周、夢に胡蝶となる。栩々然として胡蝶なり。自ら志にかなへるをよろこび、周たるをしらず。俄然として覺めれば、すなはち遽々然として周なり。しらず、周の夢に胡蝶となるか。胡蝶の夢に周となるか。周と胡蝶と、かならず分あらん。これこれを物化といふ。

この文にとつて、しか命じたのであつた。芭蕉は。平生莊子を愛讀し、無爲、自然を要とするその思想には、おほいに共鳴するところがあつた。

のち四年、貞享元年の句に、

もろこしの俳諧とはんとぶ胡蝶

これまた莊子のこの文にちなむ句であつた。芭蕉の見るところ、莊子の思想は、さながらの俳諧であつた。

その他「東坡が風情、杜子が洒落、山谷が氣色」の類、みな芭蕉のよろこぶところであつた。

芭蕉が、これらの諸家をよろこんだのは、その性格のしからしむるところ、自然にこれに興味を感じ、ふかく共鳴するところがあつたからで、たゞ漫然とよみ、漫然と誦するのとはちがひ、感化の程度も人一倍であつた。これによつて、その思想は、いちじるしくふかめられた。その性格は、ますますきよめられた。その人格は、いやが上にもたかめられた。

さてその思想、乃至、人格をひつさげて、天地間の事々物々に對したとき、それらのすべてが、往昔みたところとは、格別の觀を呈した。すなはち格別の見方があつた。芭蕉は、それをそのまゝ詠出すべきであつた。遺憾なるかな、ひさしくそれと氣づかなかつた。全然氣づかなかつたのではないが、充分には氣づかなかつた。さては、談林の滑稽本位を不滿としながら、滑稽にかはるべき何ものをもえず、心ならずも談林中にとゞまり、獨自の新俳諧をはじむるにいたらずして、歳月をわたつたのであつた。

二一　「枯枝に烏」の一句

芭蕉は、多年自分の滿足しうる俳諧、やすんじうる句をもとめた。その句、その俳諧のえられた時にこそ、新俳諧建立のねがひは、はたされるのであつた。

はじめ貞風にあきたりないで、談林にうつり、談林にうつつてのちも、

『どうもあきたらぬ。なぜぢやらう?』とかんがへた。

『畢竟、滑稽本位といふことが、自分の性格にあはぬのぢや。』としつた。

『それなら、自分の性格にあふ俳諧は、どんな俳諧ぢやらう? どこにあるぢやらう?』と自問した。

『何とかそれをえたいものぢや。』と、百方に工夫した。

それは、何でもないことであつた。自分の性格を句にすれば、自分の性格にあふ俳諧が、自然にしてえられるのであつた。すなはち自分の思想、性格、人格、一括して自分の「人」をひつさげて事物に對した際の特別の見方、あるひは感じ、氣分といつたやうなものを、その

まゝ十七字文にしさへすれば、おのづから滑稽本位の舊態を脱却して、自分の性格にあふ俳諧がえらるのであつた。その「人」が、さながらにその句にあらはれ、その句を誦すれば、たゞちにその人がわかるといふやうな、性格の句、人格の俳諧が、そのあひだからうまれるのであつた。そしていはゆる新俳諧は、なんなの苦もなく建立されるのであつた。

しかるに芭蕉が、それと氣づかづして、いたづらに工夫し、苦心したのは、古人のいはゆる、「道はちかきにありて、これをこほきにもとむ。」の類であつたともいへるが、そもそも機縁が熟さないのであつた。機縁が熟して、芭蕉の「人」とその句とが、打成一片、不可分のものとなるには、なほ多少の時日を要した。

かゝるあひだにも、芭蕉の門下は、おひおひふえていつた。一門の俳書も、あまた梓行せられた。延寶五年の「桃青三百韻」から、同八年の「次韻」にいたつて、次から次へとあらはれた。

「次韻」にみえる芭蕉の句とても、從來のそれと大差はなかつた。門人の句も同様で、掟にも格にもかゝはらない大膽なものがおほかつた。

女の影かへるとみえてあさすごく　桃青

若衆氣にしてやつれしほるゝ　揚水

すとんと茶入おさしては命とも　其角

とりあへず狂歌つかまつる月　才丸

秋のすゑつかた嵯峨野をこほりはべりて　其角

薄の院のみさゝぎをとふ　桃青

夢の身は何ゝ松魚にさめかねて　揚水

われきく俗は口にきたなき　其角

生面をけくぢかれては念無量　才丸

泥棒きえて雨の日あをし　揚水

大體この例であつた。　桃青

しかるに、この年の秋、

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮

の一句があつた。芭蕉は、なんとなくこの句が氣にいつた。この句にこそ、自分の性格がさながらにあらはれてゐるやうにおもはれた。句中に自分をみるやうな感があつた。

『なるほど自分は、秋の暮、枯枝にとまる烏に趣味をおぼえる人間ぢや。酒落や地口は、自分のがらぢやない。滑稽本位は、自分の性格にあはぬ。自分の性格にあふ句、したがつて自分の滿足しうる句、やすんじうる句、自分のもとめる俳諧のあたらしい道は、必定こゝらにあるのぢやらう。』芭蕉は、内心ひそかにうなづくこころがあつた。

かつうなづき、かつ吟ずるほどに、この句には、從來のものと全然ことなるおもむきがみとめられた。これまでの句にないものがあつた。それは、「閑寂」といふことであつた。いかにもしづかな、いかにもさびしい一種のおもむき、すなはちさび、これは、從來の句になくして、ひとりこの句にあるものであつた。

二二　さびとしをり

前にも「梢よりあだにおちけり蟬の殼。」といひ、「秋きにけり耳をたづねて秋の風」。といふ

をはじめとして、

汗水やよし野どまりの笈山伏

夏の月御油よりいでて赤坂や

けさの雪根深を園のしをりかな

霜をきて風をしきねの捨子かな

といふやうな、さびしみをおびた句はありながら、それにはなほ、何となく談林の臭がついてゐた。自然そのさびしみといつても、この「枯枝に鴉」の句のやうにはいちじるしくなかつた。この句のやうに、それのまざまざとでてゐるものは、從來みないところであつた。

芭蕉は、つくづくとおもつた。

『このさびしいおもむきこそ、このさびこそ、自分のやすんじうる場所ぢや。自分がこれまで、自分の性格にあふ句をもとめてをつたのは、畢竟このさびをもとめてをつたのぢや。』かうおもつて、おほいに自得するところがあつた。

そして結局一つの斷定に達した。

『自分のやすんじうる俳諧は、「自分の俳諧」でなけりやならぬ。自分の俳諧は、自分の性格にある。むしろ自分の「人」にある。この「人」をひつさげて、周圍の自然・人事をみて、そのみるところ、感ずるところを句につくれば、そこにその人の句がある。この芭蕉の俳諧がある。』かうした斷定に達しだ。

『それにしても、自分は、自分の性格、自分の「人」を外にして、別の方面にあたらしい俳諧をもとめてきた。さてさておろかなことではあつた。』かうおもふにつけて、自分の過去がつくづくとかへりみられた。

しかし既往をいさめることはできぬ。おふべきは、たゞ來者である。一たびこの句があるにおよんで、

夜ひそかに虫は月下の栗をうがつ
よるべをいつ一葉に虫の旅寢して
花木槿はだかわらべのかざしかな
いづく時雨笠を手にさげてかへる僧

それに既揭「乾鱈」の句が、同じ年、つぎつぎに吟じだされた。

まことに「枯枝」の一句こそは、芭蕉の句風に一新紀元を劃するものであつた。否、わが國の俳諧史上に一新紀元を劃するものであつた。貞風になく、談林になく、まして守武、宗鑑になくして、ひとりこの時の芭蕉にあつた。

さび、しをりを生命とする芭蕉の正風は、この時、この句にうまれでた。

この句には、

鍬かたげゆく霧のとほ里

といふ素堂の脇がついてゐた。また「とまりたるや」の六字は、のち「とまりけり」の五字におきかへられた。去來が、「次韻のころまでは、たゞ法式をやぶりたまふこいへども、のちはもとにかへりたまふ。」といつてゐるのは、こゝにもその一例があつた。

芭蕉が、一時法式すなはち捉にも格にもかゝはるまいとしたのは、一應もつともなことであつた。けれど、そんなことによつて、あたらしい俳諧をつくりださうとしたのは、無理であつた。

いかに法式にかゝはらず、いかに縱横自在にやつたとて、肝腎の思想を閑却したのでは、新俳諧も新句境もあるべきでなかつた。思想を無視して、たゞ法式をやぶり、それによつて新句境をひらかうとしたのは、かへつてこれ、法式にかゝはるものともいふべきであつた。

『法式は、こふを要せぬ。從前のまゝでもよい。問題は、たゞ思想にある。』芭蕉は、こゝに氣がついた。さては、「のちはもとにかへりたまふ」といふことになつたのであつた。

つたへいふ、芭蕉は、その頃、談林派の人とまじはり、自然その風の句をつくつてゐた。しかるに、一日この句を唱出した。衆は、愕然として耳をそばだて、つひに芭蕉を上座にたつとんだ。芭蕉は、いくほどもなく正風の一派をひらいたと。

二三　貧をあぢはふ

延寶八年、三十七歳の年こそは、芭蕉の生涯にとつて、まことに重大な、記念すべき年であつた。この年、芭蕉は、「枯枝に烏」の一句に、「人」とその「句」との、二つのものでないことを發見した。性格または人格の俳諧、これが本當の俳諧であることをしつた。俳諧決して他にもとむべきものではなく、各自の性格の中にこそ、まことの俳諧の伏在することに氣がついた。

『人即句ぢや。句即人ぢや。兩者をあはせて打成一片ぢや。人はとにかく、自分にあつてはたしかにかうぢや。いや、かうなくてはならぬ。今までの自分の句は、あまりに自分にとはいものであつた。今こそ俳諧の眼があいた。』かうおもつて、芭蕉は、天空海濶、頓に胸のすくをおぼえた。これ、とりもなほさず、新俳諧建立の業が、まさにその緒についたのであつた。

『記念すべきこの年よ、この句よ。』芭蕉は、心ひそかにさけばざるをえなかつた。

かやうに人と句とが打成一片で、俳諧が性格の中に伏在するのは、やがて生活の中に伏在するのであつた。性格すなはち俳諧。ゆゑにまた、生活すなはち俳諧でなければならなかつた。

『性格にしたがつて、生活がある。人の生活は、みんなその性格からきてゐる。』と同時に、生活によつて性格がある。生活狀態、生活方法のいかんに應じて、それぞれの性格がさだま

る。性格と生活とは、一に歸する。俳諧が、性格によるものなら、また生活にもよるぢやらう。生活と俳諧とも、一に歸するぢやらう。曰く性格、曰く生活、曰く俳諧、この三は、三位一體、「是三無差別」でなけりやならぬ。』芭蕉は、かうおもつた。

かうおもふにつけて、自分の日常生活がかへりみられた。それは、まづしい、わびしい生活であつた。住所をもさだめかねて、江戸の市中を一所不住に轉々しあるく生活であつた。いねては、秋の夜、耳をたづねる枕の風におどろき、おきては、雪の朝、ひとり乾鱈をかみえたことを感ずる生活であつた。やゝもすれば米鹽にもことをかゝうとする生活であつた。

世を俳諧にのがれて、名利に心のなかつた芭蕉は、さうした貧生活をいとふものではなかつた。

『生活は、人間の重事ぢや。けれど自分は、性格上、生活問題を解決しうるべくあまりに不適當にできてをる。ことに自分の頭のこの中には、風雅の魔心といふじやまものがすんでをるのぢやから、自分は、一代を貧乏でをはるの外はない。これを稱して、運命がつたないとでもいふのぢやらうが、自分は、それを遺憾におもはぬ。』こんなかんがへで、貧苦徹骨のあ

ひだにも、爽然として心をうごかさなかつた。

しかるに、今生活の中に俳諧があることを、生活と俳諧とか不一不二であることをさとつてみると、自分の貧生活が、たゞにいとふべきでないのみならず、まことにたつといものにおもはれてきた。

『自分が、あたらしい俳諧の道をもとめて、閑寂の二字をさぐりあて、さびを生命とする一新句境に達したのは、勿論自分の性格によることぢやが、一つはまた、多年貧乏をしてをるからぢや。自分の性格による自分の貧乏であると同時に、自分の貧乏による自分の性格といふことも、かならずあらう。しからば、自分の性格からが、自分の貧乏のたまものぢや。自分の性格をやしなつたもの、現にやしなひつゝあるものには、李白があり、莊子があり、わけては種々の佛書があるが、それらとあひ應じて、今一つ貧乏生活がある。自分の性格、自分の俳諧の源泉となる自分の貧乏、これがどうしていさはれやう。』芭蕉は、そんなことをおもつた。

『さうぢや、自分は、貧乏をいとふまい。貧乏をいとはないで、貧乏をあぢはゝう。』はては

かうと決心した。

金のさばる世の中は、昔も今とかはらなかつた。江戸、大阪などの大都會にあつては、ことにさうで、人の生活が華美であるだけに、金を要することもおびたゞしく、自然猫も杓子もといつたやうに、黄白にあこがれた。貧乏を罪悪でもあるやうにこゝろえて、富者は、ますますとまうとし、貧者は、なんとかその境界をのがれやうとした。

さうした中にあつて、たゞ一人、あへてさわがず、あへてうごかず、しづかに貧乏をあぢはうと決心した芭蕉の姿は、をゝしくもまた、さびしいものであつた。神々しくもまた、わびしいものであつた。

爾後の芭蕉は、まことに貧をあぢはふ人であつた。いひかふれば、世をわびてすむ人であつた。これまでとても、それにちかい生活をつゞけてゐた。けれど貧をあぢはひ、世をわびてすむあひだにこそ、自分の俳諧があらうとは、かつておもひまうけなかつた。芭蕉のわび人生活は、「枯枝に烏」の句のあつたこの時をさかひとして、その根柢をえ、非常におちつきのあるものとなつた。

すなはち翌天和元年、三十八歳の時の句に、

月をわび、身をわび、つたなきをわびて、わぶとこたへんとすれど、とふ人とても
なし。なほわびわびて、

わびてすむ月侘齋がなら茶歌

この心もちは、ながく芭蕉を解するものの關鍵となつた。

二四　深川の新住所

其角、嵐雪をはじめ、門人らの芭蕉におけるは、師弟といふよりも、むしろ父子のごとくで、いづれも敬愛のかぎりをつくした。それは、畢竟芭蕉の德望のいたすところであつた。芭蕉は、他の俳諧師が、點料をむさぼり、謝儀を要するのことはことなつて、それらのことには、全然無頓着であつた。金持の腰巾着となつて、色里にたはむれることを、無上の幸運とこゝろえる幇間的宗匠連中のあひだにあつて、ほとんど清僧のごとくに身をもつた。そしてたゞたゞこの道の興隆をもつておのれの任とし、あたゝかい情愛のうちに後進を誘掖した。

門人らが、父とも母ともあふいで、ねんごろに師事したこと、何の不思議はなかつた。

しかるにその師は、多年市中に漂泊して、わびしい日また日をおくつてゐる。貧乏は師の本望とするところかもしれぬが、こゝさだまる住所のない一事は、門人一同の坐視するにしのびえないところであつた。其角らは、師の心中をはかりかねつゝも、

『せめてお住居だけでもおきめなされては……』と、さにかくこんな話をもちだした。芭蕉は、これをもつともときいた。芭蕉は「かんがへる人」であつた。それは、主として人生をかんがへ、俳諧をかんがへるのであつた。最近あたらしい俳諧の道を發見するにおよんで、かんがへなければならない新問題が、雲のごとくにむらがりおこつて、かれの全思想界をおそつた。

それらの問題について、しづかにかんがへたいとおもふにつけて、こまる一つは、住所の不定といふこと、これであつた。

『一所不住の漂泊生活をしてをつたのでは、さてもおちついた心にはなられぬ。自然しづかに物をかんがへることもできぬ。殘念ぢやが、これも運命なら、いたし方はあるまい。まづ

まづ……』とおもふをりから、今其角らの言葉に、

『どこか適當な家があつたら……』とこたへた。

其角らは、わが提議のいれられたことをよろこびつゝ、同門の人たちにもはかり、あちらこちらと、いはゆる「適當な家」を物色した。

『私は、深川に家を二軒もつてゐる。その一軒を提供しやう。ひとまづそれへはいつてもらはうぢやないか。』といひだしたのは、杉風であつた。魚商で、幕府のお納屋をつとめてゐた杉風は、深川に籠をまうけて、鯉をかつてゐた。家といふのは、その番小屋であつた。一軒は採茶庵と號し、杉風みづから、別墅としてもちゐてゐたが、今一軒は、近來鯉をかふこともなく、廢屋同樣になつてゐた。杉風は、それを提供しやうといふのであつた。

『それはさいはひだ。深川といへば、市中の繁華をはなれて、なかば田舍だから、師がすまはれるには、もつてこいだ。』といふので、そのよしを芭蕉につけた。芭蕉にも異存はなく、やがてそれへひきうつつた。師おもひの其角らは、やつと安心することができた。

多年の漂泊生活ををはつて、天和元年、三十八歳の冬といふに、はじめてえた芭蕉の新宅

は、小名木川の水が隅田川におちるあたり、六間堀にあつた。隅田川に平行して、小名木川に通ずる堀割の名が、いつしか兩岸の地にもうつしもちゐられるやうになつたのであつた。

六間堀のあたりは、ほゞ市街をなしてゐた。附近に幕府の大船安宅丸ををさめたお船藏があり、そのかたはらから、小名木川にかけられた萬年橋をわたると、そこにも海邊大工町の市街地があつた。そのむかし、一部は海、一部は蘆荻の潮入で、人のすまはるべき場所でなかつたのを、慶長中、伊勢の人深川八郎右衞門といふが、官にこうて、小名木川沿岸から北へ本所石原の邊を開墾したにはじまる深川は、天和、貞享のころにおよんでも、右の兩地六間堀のあたりと海邊大工町ぐらゐが、市店となつてゐて、他の大部分は、蕭條たる田里のあひだに、五六の大名屋敷、若干の士地があり、他には、海に瀕して、わづかに漁村があるにすぎなかつた。勿論江戸のうちではなく、下總葛西領に屬して、ほんの田舍であつた。こゝに隅田川に橋がなく、江戸へのゆきゝに、兩國橋へまはるか、渡船をもつてするかの外なかつた一事は、田舍のこの深川をひとしほ田舍にした。今芭蕉のすむこととなつた六間堀などは、この寒郷にあつて、まづは便要の地であつた。

もともと籠の番小屋としてまうけられた芭蕉の新宅は、六疊一間きりの、それこそ草の庵であつた。ひさしく使用されないでゐる庭の池には、木の葉がおちこみ、そのまはりには、かれがれの葦が、みすぼらしくおひしげつてゐた。其角らのみたこほり、貧をあぢはひ、世をわびてすむ芭蕉のためには、まことにふさはしい住所であつた。

二五　艪の聲浪の音

が、芭蕉は、さすがにさびしかつた。群居をこのんで、孤獨をにくむのは、人の天性である。希臘の哲學者は、「人間にとりて、もつともこゝろよきものは人間なり。」といつてゐる。市中にすんでは、鵜の目、鷹の目、利をあらそふ有象無象の喧噪に靜思をさまたげられて、やゝもすれば心を山林の閑寂境にはせた芭蕉も、今、深川の寒郷、蘆おひ荻しげるがなかに自分をみいだしたときには、

『あゝ、自分は、本當のひとりになつた。』かうおもつて、わが身がかへりみられた。

つゝとたつて、濡椽へでてみた。あれにあれた庭上には、古池と枯蘆とを外にして、何のみ

るところもなかつた。庭下駄つつかけ、草の戸をでて、その附近をあるいてみた。隅田川へおちる小名木川口には、萬年橋の上下にわたつて、幾艘かの奥州船があつまつてゐた。江戸の繁華につれて、下總、常陸邊の船が、小名木川を漕路として、さかんに來往した。その船を奥州船といつた。深川のうち六間堀や海邊大工町の地が、元和以降、この頃へかけて、いちはやく市店となつたのは、この奥州船におふところがおほいとのことであつた。芭蕉のとひにこたへて、

『海邊大工町の住人は、大部分奥州船の船大工です。』といふものもあつた。また、『この橋は、元番所橋といひます。』といふものもあつた。萬年橋の袂には、以前船番所があつたところから、この橋、一名を元番所橋ともいふのであつた。

をりからついた一艘の船からは、旅よそほひの二三人があがつて來た。

去レ國三巴遠。　登レ樓萬里春。
傷レ心江上客。　不ニ是故鄕人。

芭蕉は、ふと唐の盧撰の詩がおもひだされた。

『自分も、國をさつて十年になる。』かうおもつて、客愁をあらたにしつゝ、踵をめぐらすをりから、夕暮つぐる鐘の音が、殷々としてひゞいてきた。目をあげると、上野の森はこんもりとして、淺草觀音の甍、五重の塔が、つひ鼻のさきに發見せられた。

『おゝ、富士が……』おもはずさけんで、足をとめた。雪の富士が、西天ひくゝ、寒さうな姿をみせてゐるのであつた。その富士が、刻一刻、夕靄の中にきえさるころには、隅田川をへだてた江戸の町の灯が、ちらちらとみえそめた。

草庵の夜は、また一段のさびしさであつた。うすぐらい行燈の光は、六疊の一室をかつかつにてらした。片隅におかれた一脚の机と一個の火鉢、このほかには、たゞ自分があつた。今一個自分の影があつた。前年髪をおろしたとき、杉風は、

きさらぎは十徳をこそまをすなれ

の一句をものした。そのまるい頭の十徳姿が、影となつて壁にうつつたところは、われながら悄然たるものであつた。妻もなく子もないひとりぼつちの身にそふものとては、たゞこの影法師があるばかりであつた。自分がうごけば、影もうごく。影がうごけば、自分もうご

く。孤獨の幽人寒山には、

此時迷レ徑處。　形問レ影何從。

の句があつた。孤獨の感は、わが影をえてひとしほふかい。

『おい……』とよんでみた。影には何のこたへもなくて、庭の枯蘆の風にそよぐのか、さらさらときこえた。

さびしさにめいらされた芭蕉は、句を案じる心もしなかつた。書物をひらく氣にもなれなかつた。

『ねやう、ねやう……』かういふと、手づから褥をのべて、それへもぐつた。

わがねたを首あげてみるさむさかな

ふと來山の句がおもひだされた。

芭蕉は、たゞねむらうとつとめた。けれど、往をおもひ、來を案ずれば、頭はますますさえていつて、ねむられるものではなかつた。しひて妄念をはらひのけ、心をしづかにもたうとすると、屋外にあたつて、異樣の音響がきこえた。小名木川をくだるのであらう、船頭たち

ちのおす艪の聲であつた。艪は、きい、きいとなつた。えんや、えんやとのかけ聲もきこえた。浪音が、ばた、ばたとひゞいた。芭蕉の心は、いつしかそれへすひこまれていつた。眼からは、わけもなく涙がながれて、枕の紙もぬるゝばかりであつた。たちまち口をついてでた一句に、

艪の聲浪をうつて腸こほる夜や涙

二三度うち吟ずるほどに、われとわが句にひきいられて、さびしさがいやましつのつた。ほとんどたへがたい心地があつた。あやしくも物ぐるほしくおぼえてきた。

名利一點ばりの世俗をいとひ、わびてすむべく決心した芭蕉も、こゝにいたつて、人のにほひがなつかしくなつた。

『川むかふの濱町には、嵐雪がをる。あすは、あれをたづねるとしやう。そして、終日人間にしたしまう。』つひそんなかんがへになる下から、

『いやいや、世をすてた自分ぢやないか。貧をあぢはふ自分ぢやないか。かつ自分は、終生の仕事として、新俳諧を建立せにやならぬ。しかもその新俳諧は、かうしてさびしくくらす

あひだからこそうまれるのぢや。このわび住居が、すなはち自分の本領ぢや。これをいこつてどうするか。』とおもひかへしなどした。

かうしたさびしい日が、幾日もつゞいた。さびしいながらも、芭蕉は、おひおひおちついてきた。

『このさびしさこそ、自分の俳諧の搖籃ぢや。』かうおもつて、一種のたのしみをさへ感ずるやうになつた。

まことに、

柴の戸に茶を木の葉かく嵐かな

消炭に薪わる音か小野の奥

貧山の釜霜になく聲さびし

などいふさびた句は、そのさびしいあひだからのみうまれた。

二六　草庵の平日

草庵には、淨求といふ道心がゐて、朝夕の役にあたつた。愚直な男で、まめまめしくつかへてゐたので、芭蕉もおほきにたすかつた。門人らも、草庵をとふごとに、すゝんで薪水の勞をとつた。けれど、かれは、ほんの一時のことであり、これは、たゞときたまのことであつた。

かくて芭蕉は、大概自分でかしいで、自分でくつた。一年、芭蕉の不在中に、近江の曲翠は、草庵をとうて、

むかしたが小鍋あらひしすみれ草

の一句に、師翁平日のわび住居をしのんだ。

米鹽の資は、みな門人からおくつた。むかし利休のながれをくむ茶道宗旦は、貧をあぢはひ、貧に徹しやうとして、ことさらに身を窮乏のあひだにおいたとか。おなじ心でゐた芭蕉とて、おごりがましいまねはかつてせず、つとめて質素に、むしろつゝめて貧乏に身をもつた。ある年、ある方への禮狀に、

新麥一二升、箏三本。油のやうな酒五升といふは、富貴の沙汰なり。蕎麥一重、小遣錢

二百文、かたじけなくぞんじまゐらせ候、

水油なくてねる夜や窓の月

貧のうちにさびをみとめた芭蕉には、富貴や、奢侈や、到底この道の蠹害たるをまぬかれなかつた。したがつて、衣食のために門人をくるしめるなどのことは、決してなかつた。

けれど門人らは、芭蕉のわび住居に同情して、そのつれづれをなぐさめるために、めづらしいもの、芭蕉の口にあひさうなもののあるごとに、草庵へおくつた。芭蕉は、その都度、これに禮狀をあたへ、そふるに自詠の一句をもつてして、感謝の意を表することをわすれなかつた。たとへば、右のある人への書のごとくであつた。

であるから、翌天和二年の春、石川北鯤生の弟山店子といふが、芹の飯をたかせて、みづから持參したときには、

わがために鶴はみのこす芹の飯

の句があつた。

芹の飯、芭蕉は、かうした淡泊なものをよろこんだ。肉類よりも野菜がすきであつた。こ

とに蒟蒻が好物で、許六の文には、

翁は、蒟蒻をすかれたり。

と見え、芭蕉の句にも、

蒟蒻にけふはうりかつ若菜かな

蒟蒻のさしみもすこし梅の花

など、まゝ蒟蒻の句があつた。天生の風人なる芭蕉は、その嗜好物からが、その人らしかつた。

芭蕉が杉風におふところは、少々ではなかつた。衣類なども、大概杉風が世話をした。この年夏、時の衣をきよらかに調じておくると、芭蕉は、

いでやわれよき布きたり蟬衣

かういつてよろこんだ。

おなじころ、杉風は、芭蕉を深川の採茶園にまねいて、納涼の小宴をもよほし、籠の鯉をつくり身にしたりした。

『蒟蒻とはいかゞでせう?』わらひながら杉風がいふと、芭蕉は、
『いや、蒟蒻とはまた格別ぢや。』とよろこび、

雪の鰒左勝水無月の鯉

と興がる下から、
『もつとも、蒟蒻の刺身もわるくはない。』このやせ我慢に、一同腹をかゝへて哄笑した。

二七「飲酒一枚起請」

門人が芭蕉を親ともしたつたごとくに、芭蕉も門人を子のごとくに愛した。中にも其角、嵐雪の二人は、元祿五年春の句に、

草庵に桃、櫻あり。門人に其角、嵐雪あり。

雨の手に桃と櫻や草の餅

とあつたくらゐで、芭蕉の祕藏弟子であつた。
しかるにその其角は、爲人放逸、もつとも酒をこのみ、さめてはのみ、さめてはのみする

ほどに、たれもそのしらふでゐるのをみたものがないくらゐで、

酒の瀑布冷麥の九天よりおつるなら ん

など吟じて、得意がつてゐた。同門のうちには、それを苦々しくおもふものもあつたが、芭蕉のみは、
『俳諧は、性格にある。其角の豪爽な句は、その豪爽な性格からうまれるので、しかもさうした性格は、酒によつてやしなはれる點がおほいらしい。豪爽な性格によつて酒をこのむ。酒によつて豪爽な性格をやしなふ。かういふわけで、一口にいへば、酒が其角の性格に適するのぢや。かならずしもとがめぬ。』こんな見方をしてゐた。そしてそのなかからも、
『たゞし、大酒にすぎる。體を損じなければよいが……』と、すくなからず氣をもんだ。
しかるに、あるとき、ある家にあそんで、「飲酒一枚起請」といふをみた。法然上人の「一枚起請文」になぞらへて、大酒をいましめたもので、

もろこし、わが朝に、もろもろの上戸たちの沙汰しまをさるゝさかもりにあらず。また
かちんをくひ、茶をのみてのめる酒にもあらず。たゞ往生極樂のためには、無南阿彌陀

佛ごまをして、うたがひなく往生するぞとおもひこりて、一杯のむより外、別の仔細は候はず。たゞし、三獻四種の肴などまをすことの候は、酒宴も決定して、めづらしき酒肴もとめたるこおもふうちにこもり候なり。このほかに、奥ふかき大盃は、二尊のおんあはれみにはづれ、本性をうしなひ候はんを愛せん人は、たとへ一代の法をまなばずとも、一文不智、愚鈍の身にして、下戸にもつねにふるまはせて、たゞ一向に酒をのむべし。

かうかゝれてあつた。芭蕉は一讀、

『これはおもしろい。酒のみには適切な文言ぢや。まつたくおもしろい。』とうなづきながら早速うつしとり、

右「飲酒一枚起請」は、尊朝親王おん作のよし、うけたまはり候。もつともさる人の許に、御眞筆にて掛物にして、床にかゝりこれあり候。あまりあまりおもしろきおん作ゆゑ、ちよとうつしきたり候。貴丈、つねづね大酒をせられ候ゆゑ、この御文句をうつして、大酒は無用にぞんじ候。よりて一句、

朝顔にわれはめしくふ男かな

いかゞ。くはしきことは、やがておん目にかゝり、萬々まをしのぶべく候。以上。

十七日　　はせを

其角丈

「朝顔」の句は、

草の戸にわれは蓼くふ螢かな

といふ其角の句があるところから、わざとそれに和してつくつたのであつた。この書が、たゞのたはむれでないことは、「くはしきことは、やがておん目にかゝり……」の一言にもうかゞはれ、世にもありがたい師の情であつた。

草庵の庭が、あまりにみどころのないのをおもつて、だれかが朝顔の種をまいていつた。種は、芽とはえ、蔓とのびて、やがて苔をもつた。芭蕉は、それをみて、

三日月や朝顔のゆふべつほむらん

などロずさみ、

『大分ふくらんできた。今にさくぢやらう。』とおもつてゐると、その翌朝あたりから、ぽつぽつとさきだした。芭蕉は食事の都度、膳を椽側へもちだして、紅白とりどりにやさしい花の姿をめでながら、飯をくつた。膳には、例の蒟蒻ぐらゐの淡泊なものがついてゐた。

二八　「芭蕉庵」の名

芭蕉は、右の其角への書に、「はせを」と署名した。はじめ宗房と號し、のち桃青とあらためたのが、さらに芭蕉と稱するにいたつた次第は、これも草庵に風致をそへんがため、門人のたれかが、庭に一株の芭蕉をうゑた。

芭蕉うゑてまづにくむ　荻の　二葉　かな

とは、芭蕉そのときの句であつた。

しかるに風土が適してゐたとみえて、一株は二株となり、三株、五株となつて、ひろやかなその葉が、窓をおほひ、庇をかくして、夏はよい日よけになつた。門人らは、いつしか庵を「芭蕉庵」、師を「芭蕉翁」よぶやうになつた。

すなはち「芭蕉庵」の號は、門人がよびならはしたので、他人の有なるその庵に、私の名を命じ、わがもの顔にふるまふなどは、かねて佛道に心をよせ、無我の消息を解してゐた芭蕉の斷じてなしえないところであつた。これ餘人のおよぶところではなく、まことにもつて芭蕉の人格をうかゞふにたつた。

のち元祿五年ごろ、芭蕉に「芭蕉をうつす辭」があつた。

菊は、東離にさかえ、竹は、北窓の君となる。牡丹は、紅白の是非ありて、世塵にけがさる。荷葉は、平地にたゝず。水きよらかなれば、花さかず。いづれの年にや、栖をこの境にうつすとき、芭蕉一もとをうゝ。風土、芭蕉の心にやかなひけん、數株莖をそろへ、その葉しげりかさなりて庭をせばめ、壹が軒端もかくるゝばかりなり。人よんで草庵の名とす。舊友、門人、ともに愛して、芽をかき、根をわかちて、諸所におくることゝ年々になんなる。一とせ、みちのくの行脚おもひたちて、芭蕉庵すでにやぶれんとすれば、かれは籬のとなりに地をかへて、あたりちかき人々に、霜のおほひ、風のかこひなど、かへすがへすたのみおきて、はかなき筆のすさみにもかきのこし、松はひとりにな

りゞべきにやと、とほき旅寐の胸にたゝまり、人々のわかれ、芭蕉のなごり、ひとかたならぬわびしさも、つひに三させの春秋をすごして、ふたゝび芭蕉に涙をそゝぐ。今年五月のなかば、花たちばなのにほひもさすがにとほからざれば、人々のちぎりも昔にかはらず、なほこのあたりえたちさらで、ふるき庵やゝちかう三間の茅屋つきづきしう、杉の柱いときよげにけづりなし、竹の枝折戸やすらかに、葭垣あつうわたし、南にむかひ、池にのぞみて、水樓となす。地は、富士に對して、柴門景をすゝめてなゝめなり。浙江の潮、三叉の淀にたゝへて、月をみるたよりよろしければ、初月の夕より、雲をいとひ、雨をくるしむ。名月のよそはひにとて、まづ芭蕉をうつす。その葉ひろうして、岑をおほふにたれり。あるはなかばふきをれて、鳳鳥の尾をいたましめ、青扇やぶれて風をかなしむ。たまたま花さけども、華やかならず。莖ふとけれども、斧にあたらず。かの山中不伐の類木にたぐへて、その性よし。僧懐素は、これに筆をはしらしめ、張横渠は、新葉をみて、修學の力とせしとなり。予その二つをとらず。たゞこの陰にあそびて、風雨にやぶれやすきを愛す。

これには、「栖をこの境にうつすこゝ、」すなはち天和元年の冬、芭蕉をうゑたゞこになつてゐるが、これは大體をいつたまでで、嚴密には翌二年春とすべきであつた。右「芭蕉うゑて」の句が、春の季であるのをみてもわかる。

舊友、門人、みな芭蕉を愛したが、芭蕉は、こりわけ芭蕉を愛した。その理由は、「たゞこの陰にあそびて、風雨にやぶれやすきを愛す。」といふことにあつた。芭蕉は、かつて「風羅坊」と號した。みづから風にやぶれやすい羅に比したのであつた。芭蕉を愛したのも、おなじ心であつた。

『體のよわい、そして世わたりの道につたない自分は、やゝもすれば、社會の落伍者にならうとする。現に落伍者であるのかもしれぬ。この芭蕉は、風にやぶれやすい。自分も、浮世の浪風にやぶれやすい人間ぢや。芭蕉と自分は、よくにてをる。』庭前の芭蕉をみるごとに、つひこんなことがおもはれた。さては芭蕉を愛し、門人らのよぶがまゝに、みづから芭蕉と稱したのであつた。

二九　「芭蕉野分して」

「たまたま花さけども、はなやかならず。」世俗の華麗をいとふわび人芭蕉には、これもうれしい一つであつた。

『芭蕉の花のさびしさこそ、すなはち自分の俳諧ぢや。』かうもおもつた。

「莖ふとけれども、斧にあたらず。かの山中不伐の類木にたぐへて、その性よし。」莊子に、南伯子綦が、商丘の地に遊んで、大木をみた。四千匹の馬が、その陰へはいつてしまふほどの大木であつた。子綦は一見、

『おほきなものぢや。何ごいふ木かしら？　すぐれた效用があるに相違ない。』といひながらあふいでその枝をみると、まがりくねつて、棟にも梁にもならぬ。俯してその幹から根のあたりをみると、もろくくづれて、棺をつくることもできぬ。その葉をねぶると、口がただれてしまふ。にほひをかぐと、わるゑひをして、三日たつてもさめぬごいふわけで、始末のわるいことおびたゞしい木であつた。子綦は、

『これはばや、みかけだふしぢや。何の役にもたゝぬ不材の木ぢや。不材の木ぢやから、こんなにおほきくなつたのぢや。古來至人とか神人とかいはれる人が、天命をまつたうし、無事に一生ををはつたのは、つかへて相將となつたり、世にでてはたらいたりせず、身を無用の地においたからで、すなはち不材のお蔭でたすかつたのぢや。宋の荆氏ごいふところは、楸、柏、桑などに適して、よくそだつ。ところが、それらの木は、みんな有用の木ぢやから、かたつぱしからきられてしまふ。畢竟材のために天命をまつたうすることができず、中途で斧斤のわざはひにかゝるのぢや。常人は、不材を不祥としてきらふが、神人は、かへつて祥ごしてよろこぶ。その理由は、この木が、不材のお蔭でこんなにおほきくなつたのをみても明白ぢや。』かういつて、つくづく感心した。

莊子には、この類の話が多々みえる。平生老莊をよろこんだ芭蕉は、窓前の芭蕉をみて、たゞちにそれらの話を聯想し、そのやはり不材の木であることをおもつて、若干の興味を感じたのであつた。

さるほどに、夏はすぎて、秋がきた。秋もおひおひくれゆく一日、朝からくもつてゐた空

は午後にいたつて、雨となつた。夜にいつては、風さへふきそうて、光景いとすごくなつてきた。常さへさびしい草庵、こんな晩には、なほさらとひくるものもなければ、芭蕉は、行燈相手にたゞ一人、ぽつねんとして、戸外にくるふ風の音に、きゝ耳をたてゝゐた。

『おや……雨がもりてきた。』といふと、突嗟の思案に、盥をもちだして、それへおいた。幾年まへにふいたものか、ひさしく廢屋同様になつてゐた草庵の屋根は、今宵の烈風猛雨をふせぐにたへないのであつた。そとでは、雨にたゝかれ、風にゆられる芭蕉が、ばたり、ばたりと雨戸にふれる。うちでは、屋根がもり、天井をつたふ雨水が、ぽつん、ぽつんと盥へおちる。

『これでは、芭蕉もさんざんぢや。』かうおもひながら、

芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな

つひにこの一句があつた。

三〇　西山宗因死す

これよりさき、三月二十六日といふに、談林の祖西山宗因が、行年七十八歳でしんだ。延寶中、芭蕉におくれて出府した宗因は、この際まで、ひきつゞき江戸にあつて、同派のために、一流の奇才をふるひ、一時は、關東俳壇の覇權をその一手に掌握した。最近芭蕉派の勃興によつて、やゝ氣勢をそがれた感はあつたが、なほかつ門下のさかんなる、多士濟々としていはゆる「功なり、名とげて、身しりぞく」ものであつた。

宗因の訃のつたへられたとき、芭蕉の門下、知人中には、

『目標をうしなつた談林派は、今後衰微の外はあるまい。いよいよ蕉門の天下になるのだ。』

こんな見方をするものもあつた。

なるほどそれに相違はなかつた。宗因の奇才も、奇才また奇才の連發では、かへつて鼻についてくる。滑稽も同様で、奥行のない口頭の滑稽には、きくものもあきずにゐない。かくて談林派もおひおひゆきつまりの狀態となつてきたとき、宗因はしんだ。新陳代謝は、物の數である。今後は、到底蕉門の天下でなければならなかつた。

が、芭蕉は、この先輩の死を、衷心からかなしんだ。

『自分が、貞風の藩籬を脱して、別にあたらしい道をもとめ、ほゞねがふところをはたすことができるやうになつたのも、おもへば宗因のお蔭ぢや。いたつて丈夫な人ぢやつたが、病氣にはかてず、つひにしなれたか。』かういつて、長大嘆息した。

それにつけても、わが俳諧の前途といふことがかんがへられた。充分の自信はありながら談林の滑稽をよろこび、貞風の洒落ををかしがる多數人に、さびやしをりを生命とする自分の俳諧が、はたして了解されるかどうかとは、芭蕉のひそかにうたがひ、かつうれふるところであつた。けれど、

『いやいや、人が何ときかうとも、自分は、自分の道をすゝむの外はない。』またかうおもひかへして、書をよみ、句を案じた。

さきに芭蕉は、俳諧が性格にあることを發見した。從來性格のむかふところにしたがつて書をえらみ、それによみふけつた芭蕉は、今や同時に俳諧のためにもよむやうになつた。これまで書中に人生をよんでゐた芭蕉に、あはせて俳諧をよむやうになつた。俳諧、讀書、人

生、性格、これらのものが、渾然として一體をあひなすにいたつた。

其角撰「田舍の句合」の卷頭の嵐雪の序文は、まへにその全文をかゝげた。それには、「桃翁、栩々齋にゐまして、ために俳諧無盡藏をとく。東坡が風情、杜子が洒落、山谷がけしきよりはじめて、その體、幽になだらかなり。」とあつた。元祿中、近江の曲翠にあたへた芭蕉の書には、

定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入る。

とあつた。死ぬとき、弟子等への遺誡として、惟然のしるすところには、

汝等、この以後とても、地をはなるゝことはなかれ。地とは、心は杜子美が老をおもひ寂は西上人の道心をしたひ、調は業平が高儀をうつし、いつまでも、われら世にありとおもひ、ゆめゆめ他に化せらるゝことなかれ。

とあつた。これも其角の撰なる「みなし栗」の跋として芭蕉のしたゝめた文の一句には、

李杜が心酒をなめて、寒山が法粥をすゝる。

とあつた。世俗をいとつた芭蕉は、日々夜々を草庵にかきこもつて、これらの書の外、佛

典をひもどき、老莊をよんで、人生をおもひ、俳諧をやしなつた。

三一　「杜老をおもふ」

「芭蕉野分して盥に雨をき」いたおなじ天和二年の秋。

　髭風をふいて暮秋嘆ずるはたが子ぞ

の句があつた。これには、「老杜をおもふ」といふ題がついてゐた。杜甫は、安祿山の變に際會して、つぶさに艱苦をなめた人。したがつて、その詩、悲調をおび、きくものをして凄然また愴然たらしむるものがあつた。芭蕉は、その悲調がすきであつた。

『これを十七字につくれば、すぐに自分の俳諧ぢや。』とおもはれるやうな句を、詩集のいたるところに發見した。

　萬里悲秋常作客。　百年多病獨登臺。

などの句は、たゞちに芭蕉自身のことであつた。

　爲レ人性癖耽二佳句一。　語不レ驚レ人死不レ休。

といふ刻意は、また芭蕉の態度であつた。

かくて芭蕉は、杜甫に共鳴するこころがおほかつたが、それ以上に西行法師に共鳴した。一部の「山家集」は、在庵の日も、旅行の折も、つねに芭蕉の座側にあつて、その愛吟をまつた。

さらでだにうかれてものをおもふ身のこゝろをさそふ秋の夜の月

西行の心は、たえず自然の風物にさそはれていつた。しかもそのさそはれかたは、尋常でなく、

　かくばかり月に心のすみすみてはてはいかにかならむとすらむ

といふのははげしさであつた。その心をひきとめることができなかつた。月をわすれ、花をわすれて、しばし長閑にゐたいとおもつても、そのかひがなかつた。たゞにかひがなかつたのみではなく、はては、

　ねがはくは花の下にてわれしなむそのきさらぎの望月のころ

こんな心にさへなり、身も世もあられず、たゞたゞ月花のうちへ吸收されてゆくのであつ

た。

これ西行の頭にも、芭蕉のいはゆる「風雅の魔心」かのじやまものが、すんでゐるのであつた。芭蕉には、その心もちがよくわかつた。わかつただけに、共鳴するところもふかゝつた。

その他、老莊の格淡なる、寒山の幽寂なる、みな芭蕉の日に夜にしたんだところで、芭蕉は、それを草庵のわび住居に體驗しつゝ、十七文字に詠出した。かくて芭蕉の俳諧は、日々に、その特色をあきらかにしていつた。

草庵へは、時々門人がやつてきた。芭蕉は、ために俳諧の話をしてきかせたり、その句を添削してやつたりした。

門人、知人の外、今一個、愛らしい來訪者は、小鳥であつた。六間堀、海邊大工町のあたりをのぞいて、大部分が村里であつた深川には、小鳥がおほかつた。それらの小鳥が、草庵の庭へさんできては、古池のあたり、芭蕉の葉陰をとびまはつて、ちゝ、ちゝとないた。芭蕉には、それが自分の徒然をなぐさめやうとするもののやうにおもはれた。

ほろほろとなく山鳥の聲きけば父かとぞおもふ母かとぞおもふ

ふと行基菩薩の歌を口ずさんで、

『過去多生のあひだには、あの小鳥も、自分の父であつたかもしれぬ、自分の母であつたかもしれぬ、』などおもふにつけて、可憐さいふばかりなく、米をつかんで、ばらばらとまいてやつた。そんなことが毎度になると、小鳥どもは、いつかしか芭蕉になれてしまひ、はては座席ちかく椽側へきて、ちゝ、ちゝとなくやうになつた。

芭蕉の歿後、門人岱水は、

亡師の閑座をこひくる小鳥どもをあはれみたまふをおもひいでて、

枯庭に米くれられし雀ども

と詠じ、利合は、

墨のついたるふるき座蒲團

と脇して、ともに懐舊の涙をふるつた。

小鳥にさへ同情のふかかつた芭蕉、人間に對してはなほさらのことで、年の冬、菜うりが

くると、

さしこもる葎の友か冬菜うり

と吟じ、親愛の意をあらはした。芭蕉の心は、何人、何ものに對しても、つねにあたゝかかつた。

夜着はおもし呉天に雪をみるあらん

といふのも、けだしおなじころの句であつた。

三二　諸行無常諸法無我

元祿三年、江州石山の幻住庵へはいつたとき、庵の記一篇があつた。それにしるしてゐるごとく、はじめ「仕官懸命の地をうらやみ」て、あつばれ武士にならんものと、藤堂家につかへ、のち主人蟬吟の死に會するにおよんで、世の無常を感じ、「一たびは佛籬祖室に入らんこせし」芭蕉とて、つとに心を佛道によせ、蟬吟や藤堂家の一族の任口上人やの指授をうけたを手はじめに、京都から江戸へとうつりあるくあひだにも、佛典を誦しておこたらなかつ

た。かくて釋尊の教義は、芭蕉のほゞ了解するところであつた。

芭蕉のみるところ、佛教の要旨は、諸行無常、無法無我の二句につきた。

『八萬四千の法門、その品はおほいけれど、この二句を縱說橫說したまでで、二句の意味がよくわかれば、佛教の全體がわかつたにちかい。』がうおもつて、篤とこの二句をかんがへてみた。

「諸法」は、萬物である。この世界には、種々の物がある。それらの物は、それぞれ一個のものとして、他の物から區別される。各自に自性を有するところの、實體としてかんがへられる。かくて世界は、差別の世界である。

けれど自性とは何？　實體とは何？とおしつめてみると、それらは、しかみる人の妄念にすぎない。

たとへば、こゝに一軒の家がある。その家について、自性をたづね、實體をもとめる。もとめてえるところは、石であり、木であり、竹であり、土であり、金であり、瓦であつて、家の自性、家の實體といふものは、どこにもありはせぬ。

自性がなく、實體がないのは、さりもなほさず家がないのである。家について實體をもとめると、家といふものがなくなつてしまふ。土臺の石は、家ではない。屋根の瓦は、家ではない。老子に、「きはめて車をかぞふれば車なし。」とはこゝのことで、老子の説は、また佛教の説である。

あるひはいふ、それらの石乃至瓦は、各單獨に存しないで、一體のものとして統一されてゐる。その統一の上に家がある。その統一されてゐること、それが家の自性であり、家の實體であると。

石や瓦は、はたして統一されてゐるか。かりに統一されてゐるとして、しからば何が統一してゐるか。石、瓦などが、たがひに相談し、心をあはせて、統一體をなしてゐるか。そんな形迹は、すこしもない。そこにあるところは、一つ一つの石であり、乃至、一枚々々の瓦である。

なるほど人は、家の材料なる石や瓦が、統一されて、一つの實體をなしてゐるとみるには相違ない。それは、人がみるのである。心、きびしくは主觀は、統一するものである。熱と

蠟のとけることとを統一して、それに因果の關係を附したり、色、味、香などの諸性質を統一して、一個の實體林檎とみたりする。それと同樣に、石、瓦などの材料を、一軒の家にまで統一する。こゝにおいて、家また、一個の實體としてみとめられる。「家」なる觀念を生ずる。けれど、いはゆる統一は、主觀がするのである。統一は、たゞ主觀にある。もし主觀をとりのけてみるならば、そこに存するところは、たゞ一つ一つの石であり、一枚々々の瓦である。そこには何の統一もない。したがつて、自性もなく、實體もない。またしたがつて、一個のものなる家といふはなく、それは、たゞの觀念である。

家のことは、勿論ほんの一例にすぎぬ。他の萬物がすべてさうである。それに自性があり實體があるやうにかんがへられるのは、主觀の統一性によることで、主觀の統一を外にしては、實體としての物はない。すべての物が、その材料にまで分解されてしまふ。すなはち物はなくなつてしまふ。たゞの觀念に歸してしまふ。

であるから、智度論には、「法は自性なし。自性なきが故に、すなはちこれ畢竟空なり。」とみえ、維摩經には、「諸法は、如幻の相にして、自性なく、他性なし。」とみえ、寶積經には、

「諸法の自性は、不可得なり。夢に欲をおこなひて、悉皆虚空なるがごとし。」とみえ、それらは、主觀のわざであるから、華嚴經には、「心は、たとへばたくみなる畫師のごとし。よくもろもろの世間をゑがき、五蘊ことごとく生ず。」とみえ、心地觀經には、「わが佛法のうちには、心をもつて主となす。一切諸法、心によらざるはなし。」とみえる。

したがつて、心すなはち主觀をとりのぞけば、物すなはち、實體として統一された一個の物はなくなつて、その材料に歸する。

かくて、

生死去來。　棚頭傀儡。
一線斷時。　落々磊々。

といふ偈もあり「四大の寄細工」のたとへもある。

地、水、火、風、これを四大といふ。萬物は、この四大の統一になる。しかもこれを統一するものは、心である、主觀である。主觀をさつて萬物はなく、そこにはただ四大がある。

『いひかふれば、萬物の差別はなくなつて、ただ四大の平等に歸してしまふ。すべてが空ぢ

や。すべてが無ぢや。大乘起信論にいはゆる、「一切諸法は、だゞ妄念によりて、差別あるなり。もし心念をはなれば、一切境界の相なし。」ぢや。もしくは、

迷故三界城。　悟故十方空。
本來無東西。　何處有南北。

ぢや。差別のないものを差別のあるものとみる心ぢやから、「迷」としていみ、「妄念」としてきらふのぢやらう。』芭蕉は、諸法無我の理を、まづもつて、かういふことにかんがへた。

三三　無我解脱の人

『しからば、四大はいかゞ?』芭蕉は、さらにかんがへすゝんだ。

差別の萬物は、無に歸するとして、平等の四大は有であらうか。いな、それも無である。平等の四大、くはしくは平等の狀態において存する四大といふはない。

けだし四大といひ、平等といふ、それは一つの概念にすぎぬ。四大は存する。けれど、それは、何らかの物として存するので、平等の狀態において存する四大といふはない。それを

かんがへるのは、概念を實在視するところの迷妄である。

かくて差別の萬物もなく、平等の四大もないとして、しからば何もないかといふに、あふげば日月星辰あり、俯せば山川草木あり、森羅萬象が歴然として存在する。

これ畢竟、萬物は、四大によつて存し、四大は、萬物によつて存するのである。差別は、平等によつて存し、平等は、差別によつて存するのである。これを稱して、「差別即平等、平等即差別。」といひ、「色即是空、空即是色。」といひ、蘇東坡は、詩につくつて、

紈裘不レ畫意高哉。　若着二丹青一墮レ二一來。
無一物中無盡藏。　有レ花有レ月有二樓臺一。

といふ。みなこの心である。

であるから、佛教では、有無の一偏に執することをきらふ。差別をみて平等をみないのも平等をみて差別をみないのも、ともにまちがつてゐるとして、中道觀をとる。

しかるに、なべての人が、有に執して、無をわすれ、差別にとらはれて、平等を逸してゐる。いはゆる有は、無中の有である。そこに自性があり、實體があるのではない。萬物無に

歸し、人間また同斷であるのに、おほくの人が、自分を實體とみ、靈魂などいふ自性をたてゝ、おれが、おれがをふりまはす。靈魂とは何か。これまた主觀がもろもろの心作用を統一することによつて生ずるところの觀念にすぎぬ。

かくて人も、物も、無に歸する。無に歸しながら、無の一偏に執するのはまちがひで、無のまゝの有であり、有のまゝの無である。人もある。物もある。あるそのまゝが、また無である。

これを稱して、「諸法無我」といふ。「無我」は「われなし、」すなはち自性のないことを意味する。

自性がなく、無我であつたら、萬物は、一體何であらう。萬物は變化する。生、住、異、滅の次第をおうて、時々刻々に變化する。ながれる水のしばしもとゞまらぬごとくである。孔子のいはゆる、「ゆくものは、かくのごときか。晝夜をすてず。」である。

まことに、この世界は、實在もしくは四大のながれである。水はながれて、川となり、瀬となり、淵となり、瀧となり、雨となり、霰となり、雪となり、氷となる。實在も同樣で、

ながれながれて、人となり、物となり、山となり、海となり、木となり、草となり、花となり、鳥となる。

それは、平等一如のものなる實在が、因にしたがひ、緣に應じて、さうした形をむすぶのである。

したがつて、萬物に自性はない。自性がないから、しばらくも同一狀態をたもたないで、時々に流轉し、刻々に變化する。まへにいはゆる、ながれながれる。

この變化、これを「無常」といふ。「諸行無常」なるものである。「諸行」は、「諸法」といふとおなじで、やはり萬物のことである。

かんがへさり、かんがへきたつて、

『これを要するに、諸法は無我じや。諸行は無常ぢや。無常ぢやから無我。無我ぢやから無常。かうかんがへてもよい。いづれにしても、時々刻々に變化して、自性のないもの、これが人ぢや、萬物ぢや。これをたとへると、

西行も牛もおやまもなにもかも土のばけたるいなりかいだう

一休和尙の歌、うたひえて妙ぢや。なるほどばけものに相違はない。』芭蕉は、つくづくとおもつた。

またおもつた、

『自分は、篤とこの理を會得せにやならぬ。この理を會得し、無我の心もちになることができれば、われもなく、かれもなくて、萬物は一體ぢや。生もなく、死もなくて、生死は一如ぢや。毀譽褒貶、利害得失の類、一切いふにたらぬ。自分は、すなはち解脫の人ぢや。』

最後におもつた、

『佛敎の期するところは、人を解脫の域に達しさせるにあつて、しかも解脫の道は、諸行無常、諸法無我の理を會得するにある。八萬四千の法門といへば、大層にきこえるが、そのとくこころは、諸行無常、諸法無我の二句をでぬ。』

かくて、多年心を佛道によせた芭蕉は、ある程度まで無我の人であつた。したがつて解脫の人であつた。かれが名利にかゝはらず、貧富にあづからずして、かへつて貧をあぢはひ、世をわびてすむべく決心することができたについては、おほいにその素があつた。素は、佛

教であつた。かれは、從來釋迦のをしへにおふところがおほかつた。

三四　佛頂和尚に參ず

が、芭蕉は、それだけでは滿足することができなかつた。

『諸行無常や無法無我の理を會得するのは、さまでむづかしいことぢやない。まだ充分ぢやない。諸行無常の理を會得することからすゝんで、みづからこれを體驗するのでなけりやならぬ。口に無常を談じながら、心に常住のおもひがあるのでは、なんにもならぬ。諸法無我の理を會得した上は、たゞちにこれを體驗するのでなけりやならぬ。理屈の上では無我としりながら、「我」の一念がうせないのでは、なんにもならぬ。「會得」にはじまつて、「體驗」にをはる。この體驗、これを稱して、「開悟」といふ。いはゆるさとりなるもので、こゝにおいてか禪がある。禪は、

教外別傳。　不立文字。
直指人心。　見性成佛。

を標榜し、その要、開悟の二字にある。自分は、さらに禪へゆかにやならぬ。』芭蕉は、かうおもつた。

時に小名木川むかふの海邊大工町に、佛頂和尚といふがゐた。禪家の知識で、常陸鹿島根本寺の住職をしてゐたが、一年鹿島の神領とのあひだに、土地あらそひがおこり、その解決がつかず、やむなく幕府の裁決をあふぐことになつた。よつて、その訴訟用として江戸へきたが、事はなはだ面倒で、たやすくは落着しないところから、ひさしく海邊大工町に逗留してゐたのであつた。

しかるに、江戸には、かねて和尚の名をきゝしるものがあり、それらの人は、われもわれもとこれに參じた。かくて和尚の庵は、一見寺のやうになり、臨川寺といふ名さへついた。六間堀からは、つゞ目と鼻のあひだにて、芭蕉もついて祖意をたゝき、おほいにうるところがあつた。

この參禪は、芭蕉の俳諧にすくなからぬ利益をもたらした。すでに佛道の大意を了し、諸行無常、諸法無我の理を會得してゐた芭蕉は、さらにすゝんで、これを體驗することができ

た。と同時に、萬物は、その面目を一變した。われも、人も、はた物も、それに自性といふはなく、因にしたがひ、緣に應じて、種々の相を呈するまでのもの、假のもの、夢幻泡影のごときものとして、芭蕉の眼に映ずるやうになつた。

『花も、鳥も、たゞ假のものに過ぎぬ。すべてが四大の寄細工で、しばらくそのものとしてあはれてをるにすぎぬ。いづれは無常のうちのもので、たちまち存在をうしなつてしまふ。』かうおもつて、それらのものをみると、いかにもあはれな、いかにもはかない、いかにももろい、いかにもさびしいものにみえた。

『さうみる自分も、假のものぢや。みるものも假、みられるものも假、それを詠じた發句も假、それに自性があるのでなければ、いづれは無常流轉中のものぢや。』かうおもふにつけてさびしさは一入で、芭蕉の全心、全身は、天地閑寂のたゞなかにひたつていつた。

しかるにこのさびしみ、この閑寂こそ、芭蕉の俳諧の命であつた。それは、參禪の一事によつて、ますますさびのある、ますますしをりのあるものとならざるをえなかつた。

この心もちは、芭蕉の私淑した西行にもあつた。かつて樗の尾の明惠上人にかたつた言葉

に、

『自分が歌をよむのは、はるかに他人とちがふ。花をよんでも、實の花ではおもはず、月を詠じても、實の月とおもはず、たゞ緣にしたがひ、興にしたがつてよむばかりぢや、自分もまた、虛空のやうな心の上で、種々の風情を色どるけれど、さらに蹤跡はない。』とあつた。これ、みるもの、みられるもの、ともに假のものであるといふに外ならぬのであつた。

またいつた、

『したがつて、この歌すなはちこれ如來の形體ぢや。一首をよんでは、一體の佛像をつくるおもひをし、一句をおもつては、祕密の眞言をとなふる心をする。ぢやから自分は、歌によつて法をえることがある。』と。西行のさとつた眼には、天地萬物、一として佛ならぬはなかつた。花も佛、月も佛、これを詠じた歌も佛、そして自分も佛であつた。

『といふのが、佛は、諸行無常、諸法無我の理をさとつた人ぢや。約していへば、無我の人ぢや。そのみるところ、われはわれでありながら、そのわれに自性はなく、實體はなくて、あらゆる流轉中の假のあらはれにすぎぬ。したがつて、他の萬物と一體をなしてをる。かく

てかれは佛ぢや。一人であると同時に、萬人である人、部分であると同時に、全體である人差別であると同時に、平等である人、佛とは、かうした人ぢや。』

さてまた、

『かうした人なる佛は、萬物をもかうしたものとみる。すべてのものが、一物であると同時に、萬物ぢや。乃至、差別であると同時に、平等ぢや。したがつて、それは佛ぢや。』

これを要するに、

『佛は、物を佛とみ、凡夫は、物を物とみる。今西行の眼に映じては、花は花佛、月は月佛歌は歌佛、すべてが佛ぢや。一首をよんでは、一體の佛像をつくるおもひ、[illegible]を案じては祕密の眞言をとなへる心をしたわけぢや。』芭蕉は、かやうに解釋した。

さて、和歌に對する西行のこの心は、また俳諧に對する芭蕉の心であつた。

かくて芭蕉は、佛頂について禪をまなぶことによつて、あはせて俳諧をまなんだ。佛頂は芭蕉の俳諧の師でもあつた。しかも今一つ、芭蕉の俳諧の師となつたものに、江戸の大火があつた。

三五　江戸の大火

天和の二年、師走もおひおひくれていつて、もはや餘日もなくなつた。

『こゝへうつつてから、もう一年になる。』芭蕉は、月日のたつのはやいのを、いまさらのやうにおどろきながら、この一年をとほして、自分の身邊におこつたことども、それからそれへと追懷してみた。すべてが過去になり、すべてが夢になる。それをし[illegible]もちは、したしいものが自分をはなれて、とほざかつてゆくのをみおくる心もち、ちやうどそれであつた。

『さうぢや、千春の「武藏曲」がでたのは、この春のことぢや。』かうおもつて、机上の冊子をこつてみた。去年の今頃よんだ「貧山の釜」の句、「鐘の聲波をうつて」の句などが、それにでてゐた。

梅柳さぞ若衆かな女かな

といふやうな、談林そつくりの句もみえた。それをみると、わづか一年のあひだにも、自

分の句風のいちじるしく變化してきたことに氣がついた。

ふと、人のざわめきが耳にはいつた。

『下谷だね。それとも神田かね。』

『いや、本郷だつていふぜ。』聲だかにはなしながら、かけてゆくものもあつた。芭蕉は、たつて椽先へでて、

『や、これは大變ぢや。』おもはずさけんだ。上野の森をかすめ、南方へわたつて、濛々たる黑烟が、空をおほうてたちのぼつてゐるのであつた。

その日は、朝から風がはゞしかつた。午後になつては、一層ふきつのり、草庵の芭蕉が、寸々にやぶれた。

『この風では、大分やきさうぢや。おしつまつての火事ぢやから、さぞこまる人がおほからう。可哀さうに……』とみてゐるうちにも、おひおひもえひろがる樣子。飛火であらう、はなれた方面からも、一二個所烟があがつて、それもみるみるひろがつてゆく。芭蕉は、胸をさゞろかせながらも、まさか隅田川をへだてた深川まで延燒しやうとは夢にもおもはず、そ

の點は大安心でゐた。

ところが、安心はならなくなつてきた。夕刻までに、本郷、下谷、神田、日本橋のあたりをなめつくしたらしい火は、つひ對岸の濱町、矢の倉、西兩國一帶にわたつてたけりくるひその火の粉が、風におくられて、川ごしにどんどんとんできた。火の粉といふよりも、むしろ火の一團々々で、なかばもえた蒲團や衣類の火のついたまゝのが、空たかくとんできて、ところきらはずばたばたとおちた。

たちまちにして、本所方面に火の手があがつた。回向院のやけるのが、鼻の先にみえた。火は五町、三町と次第にせまつてきて、六間堀の一角がもえだした。人々は、老をたすけ、幼をひきつれ、家財をおうたり、かついだりして、東西ににげはしつた。

『にげろ、にげろ。あぶないぞ。』とよびながら、はしるものがあつた。芭蕉は、とるものもとりあへず、戸外へとびだした。火は、草庵の二三軒先までせまつてゐた。

『これは……』とおどろきながら、海邊大工町の方へとこゝろざした。そこもさかんにもえてゐた。東方も一面の火になつてゐた。にげ路をうしなつた芭蕉は、ほとんど無意識に大川

呼へはしつた。火は、意地わるくその後をおつた。今は絶體絶命の芭蕉は、どつと河中へとびこんだ。

火の粉をまじへた黒烟は、河中へもおそつてきた。芭蕉は、ぬれた雨袖で顔をおほうた。河岸の家、倉がやけるころには、あつくてその身もやけさうであつた。ずつぷりと肩まで水につかり、ながれよつた苫をかぶつて、やうやく九死に一生をえた。

河岸へはひあがつたときには、目の前の六間堀をはじめ、深川各地から本所方面へかけてみわたすかぎり燒野原となつてゐた。かひなきこととはおもひながら、草庵の跡へいつてみた。のこつてゐるのは、かれがれになつた古池のみで、芭蕉も、蘆も、何もかも、みんな灰になつてゐた。

あとからきくと、火元は本郷駒込の大圓寺で、江戸のなかばをやきはらひ、死人、怪我人も、おびたゞしい數にのぼつたとのことであつた。

芭蕉は、つくづくと世の無常を感じた。平生とても、佛書をよんだり、參禪したりして、諸行無常、諸法無我の理をしつてはゐた。けれど、今まざまざとその實例をみせつけられて

は、無常の感も一入ならざるをえなかつた。

『まつたく無常の世ぢや。甍をならべた幾萬の人家も、たちまち焦土と化してしまふ。豪奢をほこつた富人の身も、一刻の間に無一物になる。たつとい人の命すらが、あてになつたものぢやない。浮世のことは、萬事萬端あてにはならぬ。今あつて後ないものぢや。すべてが煙になつてしまふ。すべてがうそになつてしまふ。萬をもつてかぞへる人の家や、富や、命やが、今度の火事でうそになつた。友誼がうそになつて、昨日の味方が今日の敵といふ例もあれば、賞讃がうそになつて、今日ほめたものが明日わるくいふ例もある。是がうそになつて非にかはり、善がうそになつて惡にかはる。自分たちの俳諧も、いづれはうそになるのぢや。貞風のさかえたのも、うそになつた。談林の全盛も、うそにならうとしてをる。自分の俳諧も同樣で、近來大分みとめられてきたが、これがいつまでつゞくことやら。一時はさかえやう、いづれはうそになつてしまふのぢや。すべてがうそ、すべてが假のもの、すべてが無常流轉中のものなら、なるほど杜子美のいつてをるとほり、「嘆息す、人間萬事非なるを。」ぢや。』こんなことをおもひつゞけ、

『ぢやから、この世界には、何一つ心をとめるべきものはない。』

ふと西行のことがおもひおこされた。行脚の途中、時雨にぬれた西行が、とある遊女屋の軒下へはいつて、しばし雨やどりをしやうとすると、その家の遊女妙といふが、

『そこにおたちなされてはこまります。どうぞ他へおこしを……』と、すげもなくことわつた。西行は、

世の中をいとふまでこそかたからめ假のやどりををしむ君かな

こうち吟じた。やゝうらんだ心もちである。

するこ妙は、ほゝゑみながら、それにこたへて、

世をいとふ人としみれば假の宿に心とむなとおもふばかりぞ

と詠じ、はじめて西行を請じいれた。

『經にも、「應無所住、而生其心。」とみえてをる。「まさにとどまるところなくして、その心を生ずべし。」それに相違はない。萬事が假のもので、一切がうそになる世の中に、執着畢竟凡夫のまよひぢや。』芭蕉は、内心おほいにうなづくところがあつた。

三六　甲斐の山中

執着はしないにしても、心はとめないにしても、人間一日も雨露をしのぐ場所がなくてはならぬ。漂泊多年、やつと安住のところをえて、やれやれとおもつたのも束の間、今また三界無宿の素浪人となつた芭蕉は、爾後の幾日かを、こゝの門人、そこの知己に身をよせてるたが、災後の江戸の混雜は、一通りでなく、どこの家でも、おちついてはゐられなかつた。家人のいらいらした様子をみると、そこに食客となつてゐるのが、氣の毒でならなかつた。

『ひとまづ伊賀へでもかへらうかしら?』そんなことをおもつたりしてゐると、杉風が、

『甲州の初雁村といふところに、私の姉がゐます。當分それへおいでなさい。山の中で、萬事に不自由ではありませうがね。』といふのであつた。不自由や食物のまづいぐらゐは、世すて人の芭蕉には問題でなかつた。この場合のことでもあり、殊に一たび旅にでて、おほいに俳膓をやしなひたいとおもつてゐたをりからとて、わたりに船とよろこびながら、翌天和三年の春早々、一笠一簑のよそほひかるく、江戸を發して、甲州にむかひ、ゆくゆく自然の大

景に接しつゝ、途中に三四日をつひやし、初雁村の杉風の姉なる人の家へはいつた。

初雁村は、甲斐の入口ながら、山國にて、四邊の景物、江戸の平板と品かはり、山あり、谷あり、谷間山陰には、のこりの雪がしろくつもつて、變化の狀をきはめ、はなはだ詩情をうごかすものがあつた。春とはいへど、山中の正月はまださむく、なく鳥さへもまれで、そのしづかさは、さらぬだに內省的な芭蕉の全心を、內省のまつたゞなかへさそつていつた。とろ〳〵ともえる圍爐裏の焚火に手をかざしながら、家人を相手に、四方八方話をするあひだにも、いひしらぬ閑寂をおぼえた。しかも、それは、涙ぐましい閑寂さであつた。

引込思想の芭蕉も、おちつかぬ旅の心から、晝間は、戶外にあそぶことがおほかつた。寒い富士颪が、頰をかすめ、領ををかしてふいた。まれにであふ山賤の顏もさむげであつた。

山賤のおとがひとづる葬かな

甲斐のながめは、何こいつても富士であつた。いつの年か、富士を詠じた句に、

崑崙は、とほくきく。蓬萊、方丈は、仙の地なり。まのあたり、士峯地をはらうて蒼天をおさへ、日月のために雲門をひらく。むかふところみな表にして、美景千變す。詩人

も句をつくさず、才人、文士も言をたち、畫工も筆をすてわしる。藐姑射の神人ありてその詩をよくせんや、その繪をよくせんや。

と前書して、

雲霧の暫時百景をつくしけり

とあつたが、このときみるところの富士にも、やはりさうした奇觀はあつた。芭蕉は、朝に、夕に、天そゝる雄姿をあふいで、崇高の感にうたれ、これに對しては、人間の手になる詩や、繪や、歌や、句やが、ほこんこ物の數ではなく、その一端をも彷彿するにたりないことをおもつて、たゞたゞ嘆息した。

初雁村から五六里をへだてゝ、谷村といふがあり、そこに五平といふがゐた。かつて江戸にあつて、佛頂に參禪し、無學でゐながら、ふかく祖意に通じてゐたところから、同學の人は、むかしの六祖慧能におもひあはせて、「六祖五平」とよんだ。芭蕉は、その爲人をよろこび、江戸にある日は、したしくまじはつてゐたが、今度甲州へきたをさいはひ、山路をこうていつては、あるひは五日、あるひは七日と、その家に逗留し、問答などをこゝろみて、山

中唯一のたのしみとした。

正月、二月、三月と、月日は次第にたつていつた。江戸では、とつくにちりすました四月にいたつて、甲州の花は、はじめてさいた。

甲斐にあること數個月、おくれた花も若葉となり、新樹となり、時鳥のなきそむるころとなつては、江戸の其角、嵐雪などから、しきりに歸庵をうながしてきた。つよさうでよわくよわさうでつよい人間は、大火の難に、一旦は膽をうばはれながらも、たちまち再興の勇氣をふるひおこし、まだ半年とたゝないのに、江戸の町々も大分復活した。門人らの心も、ほゞおちついてきた。おちつくとともに、風雅の魔心がかれらをそゝつて、

『はやく師にかへつてもらはなきや……』

『第一さびしくて仕方がない。』そんなことをいはせるやうになつたのであつた。

芭蕉も、江戸をわすれるものではなかつた、江戸は、芭蕉のために第二の故郷で、そこには、數かぎりのないおもひでの種があつた。知人のこと、門人のこと、それらのことが、たえず芭蕉の念頭を徂徠した。大火後約半歳の江戸の様子もみたかつた。今江戸からの消息に

接するにおよんで、歸思は一入痛切ならざるをえなかつた。

芭蕉は、つひに杉風の姉一家の人々にわかれをつげた。そして江戸へかへつたのは、五月の中頃で、木口あたらしく再興した家々が、夏の烈日のもとにひかつてゐた。

三七　其角の「みなし栗」

江戸へかへる早々、芭蕉は、其角の「みなし栗」の稿本をうけとつた。卷頭には、

翻レ手作レ雲覆レ手雨。　紛々俳句何須レ數。
世不レ見宗鑑貧時交。　此道今人棄如レ土。

風や世にひろはれぬみなし栗

といふ詩と句とがあり、本文には、其角、嵐雪以下一門の句、さては談林の二三子におよんで、數百句が包容せられ、蘭菊芳をきそひ、梅桃妍をあらそふの盛觀に、芭蕉は、まづもつて會心のゑみをもらした。

醴者敲レ門しだくらく花あきらかなり

鎌倉圓覺寺の大巌和尚、俳號幻吁の句を第一においたのは、わが詩文の師に對する其角の敬意であつた。其角の句には、

日蓮よ梢に蟬のなくこきは

二星ひそかにうらむとなりの娘年十五

琴をやいて水雞をにる夜酒さびし

など、その性格をみるにたり、嵐雪の句には、

鯊魚つるや水村山廓酒旗風

時鳥の二聲三聲おとづれければ、

五月雨の端居ふるき平家をうなりけり

汗にくちば風すゝぐべし竹襦袢

など、その趣味をおもふにたつた。その他、素堂、杉風、卜尺、嵐蘭などの句も、とりどりにおもしろかつた。

その間に、芭蕉自身の句が散見せられた。其角にあたへた「朝顔」の句、「老杜をおもふ」

の句をはじめ、

憂方知二酒聖一、貧始覺二錢神一。

花に浮世わが酒しろく飯くろし

一誦、自分の貧生活がかへりみられた。

氷にがく偃鼠が咽をうるほせり

潮のさす深川の井戸水は、とても飲料には用ゐられず、一桶二桶と錢をだしてかつてゐたことがおもひだされた。

概していへば、一門のたれの句にも、それぞれ新味があり、進境のいちじるしいものがあつた。芭蕉は、内心いひしらぬ愉快をおぼえつゝ、筆をとつて、早々跋文を一酒しさり、あけて其角にあへた。

栗とよぶ一書、その味四つあり。孝杜が心酒をなめて、寒山が法粥をすゝる。これによりて、その句、みるにはるかにして、きくにとほし。わびと風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人のひろはぬ蝕栗なり。

戀の情つくしえたり。むかしは、西施がふり袖の顔、黄金鑄ニ小紫ニ上陽人の閨の中には衣桁に蔦のかゝるまでなり。下の品には眉こもり、親ぞひの娘、嫁姑のたけきあらそひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をもすてず。白氏が歌を假字にやつして、初心をすくふたよりならんこす。その話、震動虚實をわかたず。寶の鼎に句をねりて、龍の泉に文字をきたふ。

これかならず他のたからにあらず。汝が寶にして、後のぬすびこをまて。

天和三癸亥年仲夏日

名を「芭蕉洞桃青皷舞書」こ署した。「皷舞書」の三字、いさゝかもつて欣快の情をしめすにたつた。

三八　芭蕉庵再建

江戸へかへつても、家のない芭蕉は、知己、門人の許に身をおくのほかはなかつた。門人らのあひだには、芭蕉庵再建の議がもちあがつた。再建といへば、大層にきこえるが、貧をあぢはひ、世をわびてすむを本領こし、そのあひだから、獨自一己の俳諧をうみださうとしてゐる芭蕉のために、その庵室一個をまうけるのは、何ほどのここでもなかつた。一門には杉風、素堂らの金持もゐた。その一手をもつてしても、優に費用をさゝへることができた。けれど、ともに道をまなび、ともに心をねる道場を、一人の手に託することは、門人一同のしのびえないこころであつた。

『では、奉加帳をまはすがよからう。』こいふことになり、素堂が筆をこつて、その趣意書をつくつた。

芭蕉庵さけて芭蕉庵をもとむ。力を二三生にたのまんや。めぐみを數十生にまたんや。ひろくもとむるは、かへつてそのおもひやすからんとなり。甲をこのまず、乙をはづることなかれ。おのおの志のあるところにまかすこしかいふ。これを清貧とせんや。はた狂貧とせんや。翁みづからいふ、たゞ貧なりと。貧のまた貧、許子の貧、それすら一瓢一軒のもとめあり。雨をさゝへ風をふせぐそなへなくば、鳥にだもおよばず。たれかしのびざるの心なからん。これ、草堂建立のよりていづるところなり。

天和三年九月、ひそかに願主の旨をくみて、筆を敗荷の下もそゝぐ。

山　素　堂

素堂のことは、前にも一言した。はじめ上野東叡山の下にすんだが、つかふるところの某家を辭するにおよび、芭蕉が六間堀へうつつたと前後して、葛飾の阿武に隱棲した。和學、俳諧を季吟にまなんだ外、儒學を林春齋に、書道を持明院家に、國歌を清水谷家について研究し、さらには、茶、琵琶、謠曲、香、花など、風流の道一として通ぜざるはなかつた人として、結局このむところにしたがつて、隱人生活にはいつたのであつた。

であるから、葛飾の庵では、池をうがつて白蓮をうゑ、

浮葉まき葉この蓮風情すぎたらん

おのれつほみおのれゑがいて蓮かな

蓮世界みどりの富士をしづむらく

など、「荷興十唱」をつくり、みづから「蓮池の翁」と號し、交友を會して、その風情を愛し、もつて晋の惠遠の蓮池に擬した。さてこそ右の文にも、「敗荷の下」といふ文字があつた

のであつた。

阿武は、その地、小名木川の上流にあつて、六間堀の芭蕉庵には、陸行、舟行、いづれをもつてしても、たやすく往來することができ、希世の隱士二人は、絶えず訪問をかはして、風雅を談じ、塵外の樂事をほしいまゝにした。それは、世にもめづらしい、まことに欣羨すべき交遊であつた。

奉加帳は、門人から門人へと、つぎつぎにまはされた。それぞれ志の金額、まれには物品をいたゞいた五十餘人の名が、たちまちのあひだに列記せられた。その總計は、さゝやかな草庵を再建するに充分であつた。その道の職人に託すると、僅々一個月あまりで工ををへ、冬のはじめ、十月の末には、芭蕉のわびた姿が、一つしかない六疊間にみえた。

『おゝ、むかしのまゝだ。』門人らは、自分たちの志になつた再興芭蕉庵を、かういつてよろこんだ。芭蕉も、

『この庵は、一本の柱も、半疊の疊も、みんな門人らのたまものぢや。自分は今、人の溫情のなかにすんでをる。』かうおもふと、しみじみとありがたかつた。

霰きくやこの身はもさの古柏

よむ句にも、なんとなく歡喜の心もちがあらはれてゐた。

しかし、燒野原にしつらへられた新草庵の殺風景さは、舊草庵よりもはなはだしかつた。ことに冬のことでもあり、あをいものとては、何一つなかつた。門人のたれかれは、一つは芭蕉庵の名にふさはしいやう、一つは師の心のこゝにおちつくやうと、ふたゝび芭蕉をうゑることにした。うゑられた芭蕉は、日のたつにつれて、昔のとほりにおひしげり、昔のとほりに蔭をつくつた。

其角の「芭蕉翁終焉記」に、「天和三年の冬、深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり苦をかつぎて、烟のうちにいきのびたりけん、これぞ玉の緒のはかなきはじめなり。こゝに猶如火宅の變をさとり、無所住の心を發して、その次の年、夏のなかばを甲斐が根にくらして、富士の雪のみつれなければと、それより三更月下入無何といひけん、昔のあとにたちかへりおはしければ、人々うれしくて、燒原の舊草に庵をむすび、しばしも心とゞまるながめにもとて、一株の芭蕉をうゑたり。雨中吟、芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな、とわびられしに

堪閑の友しげくかよひて、おのづから芭蕉翁とよぶことになんなりぬ」とは、この際のことであつた。たゞし、この時はじめて芭蕉をうゑたとし、「芭蕉野分」の句をこの時の詠とし、この時以後、「芭蕉翁」とよぶやうになつたとしたのは、其角の記憶ちがひであつた。

三九　瓢の詩と銘と句

世外の人にも世間の春がきて、芭蕉は、貞享元年の歳旦を迎へた。

年たつや新年ふくべ米五升

芭蕉庵の再建がなつた頃、門人の北鯤から、おほきな瓢をおくつた。おほきいばかりで、つかひ途がない。つかひ途がないにつけて、芭蕉は、またも莊子中の話をおもひだした。

魏の相惠子が、莊子にむかつて、

『さきだつて、魏王から自分へ大瓢簞の種をおくられた。早速まくこと、おほきな實がむすんで、五石もはいる。ところが、こまつたことに、酒をいれると、おもくてもちあがらない。二つにさいて飲器にすると、あさくかつたひらで、物をいれることができぬ。おほきいばか

りで、つかひ途がないから、到頭くだいてしまつた。』といふと、莊子の挨拶に、
『足下は、おほきいものをつかふことがへたなのぢや。そんなおほきな瓢簞があつたら、なぜそれを大樽にしてのりこみ、河なり湖なりにうかばれぬ？　すれば愉快ぢやらうに、くだくといふ法はない。畢竟足下には蓬の心があるのぢや。』といつてをしがつた。「蓬」は、よもぎである。道が蓬にふさがれるやうに、心が外物にふさがれて、道理をみることができぬ。自然拘泥の弊を生じて、自由自在がかなはぬ。それを稱して、「夫子、なほ蓬の心あるかな。」といつたのである。
『これのつかひ途のわからぬ自分は、惠子同樣、「なほ蓬の心あるかな。」のお仲間ぢやらう。』
芭蕉は、こんなことをおもつて、をかしかつた。
すると門人の某が、
『米櫃がはりにおつかひなされませ。』といつた。芭蕉は、
『なるほど、それがよい。米いれにはもつてこいぢや。そこもとは、惠子より智慧がある。』
と、呵々大笑した。

まことに草庵にはふさはしい米櫃であつた。もつとも、米の種ぎれになることもあつた。
そんなときには、

米のない時はひさごに女郎花

こんなことをいつてゐた。
あるとき素堂がくると、芭蕉は、右の瓢をさりだして、
『先生、これに名をつけてください。』といつた。蕉門の人は、大概素堂をよぶに先生をもつてし、敬意を表した。芭蕉も、學德ともにたかく、しかも自分より年うへのこの人のみは、他の門人とは同列にみず、往々「先生」の敬語をもちゐた。素堂は、
『よろしい、かんがへておきませう。』とこたへた。
のち間もなく、素堂は、一篇の詩をよせて、命名にかへた。

一瓢重二鶯山一。　自唉稱二箕山一。
莫レ慣二首陽餓一。　這中飯顆山。

毎句、山の名がはいつてゐる。よつて芭蕉は、「四山」とよぶことにし、かつこの詩を題に

して、「瓢の銘」といふをつくつた。

顔公のかきほになるかたみにもあらず、惠子がつたふ種にもあらで、われに一つの瓢あり。これを工につけて、花いるゝ器にせんとすれば、大にして矩にあたらず。さゞえにつくりて、酒をもらんとすれば、形みるごころなし。ある人のいはく、草庵のいみじき糧いれつべきものなりと。まことに蓬の心あるかな。やがてもちゐて、隱士素翁にこうて、これが名をえさしむ。その詞は、右にしるす。その句、みな山をもつておくらるゝが故に、四山とよぶ。中にも飯顆山は、老杜のすめる地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁、李白にかはりて、わが貧をきよくせんとす。かつ、むなしき時はちりの器となれ、うる時は一壺も千金をいだきて、黛山もかろしとせんことしかり。

物ひとつ瓢はかろきわが世かな

まことにさびたる風流であつた。

書をよむこと、句を案ずること、時々とひくる門人を指導すること、これが芭蕉の仕事であつた。自然外出することはまれで、月の大部分を在庵する例であつたが、あるとき、めづ

らしくも、ある人の淺草にゐるのをとふと、留守の老人が、

『主人は、他へでかけました。』との挨拶。芭蕉は、折角きたのにと、殘念におもひながら、ふとみると、庭の片隅に梅の木があつて、今ぞ眞さかり、さかんに芳香をはなつてゐた。

『おゝ、あの梅が主人ぢやないか。』といふと、沒風流な老人は、たゞ怪訝顔をして、

『あれは、となりの梅でございます。』この一言に、ますます興をうしなつて、

『では、またきます。』このみで、踵をめぐらすとき、

ゐすにきて梅さへよその垣根かな

去年の春は、甲斐の山中の花をみた。それはいたつてしづかな花であつた。今年、江戸のまんなかでみる花には、また別種のをかしさがあつた。

艶なる奴花みるやたが歌のさま

這般の景物は、山中にはないところであつた。

またあるとき、淺草の千里方にあそんで、

海苔汁や手際みせけり淺黄椀

門人中、行脚にでかけたり、遠國へ旅だたうとするものがあると、芭蕉は、かならず教誡の一句をもつて餞した。風瀑が伊勢へゆくのに、

わすれずば小夜の中山にてすゞめ

大概こんな風で、その老婆親切には、いづれもあさからず感激した。

四〇　野ざらしの旅

庭前の芭蕉が、日をおうてしげつてゆくごとく、芭蕉の門下も、月をかさねてしげつていつた。宗因の死によつて目標をうしなつた談林派が、やうやく凋落の運にむかひつゝあるにひきかへて、蕉門の俳諧は、今やおしもおされもせぬ江戸俳壇の一大勢力となつてきた。ひとり江戸のみではない。關西、北陸の各地にも、芭蕉の渇仰者があらはれてきた。

が、これを成功としてよろこびえんがためには、芭蕉の心は、あまりに解脱してゐた、あまりに俗ばなれがしてゐた。盛衰は時、榮枯は順、すべてが無常流轉中のものであることをしつてゐた芭蕉は、いはゆる成功をみるにつけても、そこにいひしらぬ哀愁を感じた。それ

をよろこぶ氣にはなれなかつた。それに執着するなどは、おもひもよらないころであつた。むしろ反動的に、貧をあぢはひ、世をわびてすむといふ方へ徹底していつた。世すて人たるその本色が、ますます濃厚になつていつた。

それには、すぐる日の急火の難に、數多の人家、數多の人命が、一朝にしてうしなはれ、その身また、九死に一生をえたといふ一事が、すくなからず手つだつた。其角が「こゝに猶如火宅の變をさとり、無所住の心を發して」とまでしるしてゐるごとく、かの不幸なる出來事は、さらぬだに厭世的なる芭蕉をして、ますます厭世的ならしめた。

寄レ語鐘鼎家。　名利定無レ盡。

といつた寒山の句などが、それ以來、特に痛切に芭蕉の全思想界をおそふやうになつた。かく世をいとふ心から、おのれの周圍をみると、人々は、無常の世を常住の世とこゝろへて、名利に執着し、名利のために、いつはりのおほい生活をしてゐる。芭蕉には、それが、いかにもあはれな、いかにもいまはしいものにみられた。たゞし、それは、「人」をいむのではなくて、たゞ「人の所作」をいむのであつた。釋迦も、孔子も、「人」をいまずして、「人の

所作」をいんだ。芭蕉の心が、ちやうどそれであつた。

芭蕉のかうした心もちは、かれをかつて、自然にむかはしめた。由來世をいとふ人ののがれ場所は、つねに自然であつた。高山の巍々たるところ、大川の浴々たるところ、そこにはいさゝかのけがれもなく、あるところは、たゞ清淨である、たゞ閑寂である。かれらは、その清淨、その閑寂において、たゞちに自分の相をみた。これその自然にのがれた所以であつた。今芭蕉も、同樣の理由によつて、自然をおもひ、しばらく江戸の俗界をはなれて、あくまで自然にしたしみたいと、そんなことをおもふやうになつた。

これよりさき、六介、六兵衛といふ二人が、はるばる伊賀から出府して、草庵をとうた。芭蕉は、二人から種々故郷の消息をきゝ、感慨のあまり、

幾千里へだつおもひや秋の風

の一句があつた。

今自然をおもふにつけて、芭蕉の心は、ひたぶるに故郷にとんだ。

『自分がはじめて江戸へでたのは、寛文の十三年で、その時は、まだ二十九歳ぢやつたが、

今年はこれ貞享元年、齢もいつしか不惑をすぎて、もはや四十一になる。滿十二年たつわけぢや。十年が一と昔なら、これみぢかい月日ぢやない。しづかな伊賀の山の中も、勿論浮世の外ぢやないから、無常流轉の數にはもれず、兄上も、さぞ年をとられたぢやらう。親類中も無事かしら？　朋友、知人のたれかれも、昔のまゝの身ではをるまい。さうぢや、この際一度故郷をこはう。自然にしたしむといつて、何も他方面へむかふにはあたらぬ。東海道から伊勢路へはいつて、一旦故郷におちついた上で、できるこゝなら、上方へもまはる。自然にしたしむ近道はこれぢや。東海道から上方方面なら、勝手もわかつてをるから、何かにつけて都合がよからう。』秋の夜長に、こんなことをおもひつゞけ、

『歸省……さうぢや、早速でかけるとしやう。』芭蕉の意は、かたく決した。

芭蕉は、そのよしを杉風、素堂、其角、嵐雪などをはじめ、門下の人たちにかたつた。一時こいへども師を手ばなしたくなかつた門人らは、

『して、お歸りは、いつごろの御豫定ですか。』まづそんなことをとうた。

『いつといつて、上方へもこおもふから……まあ半年はかゝりませうよ。』

『いや、それは大變ぢや。』とおどろく中から、その大旅行であることをおもふと、師の健康が案じられた。

『あまりお丈夫でもなし、ここにこの寒空をみかけての御旅行は、餘程おぼねだらうとおもひます。旅はういものと、これが昔からのこほり相場で、體の達者なものでも、旅では隨分つらい目をみるのですから、あひなるべくは、おみあはせがいゝでせう。是非こなら、これからあたゝかくならうといふ、來春にでもなさるのですね。』かういつて、しきりにひきとめやうとした。

芭蕉も、自分の體のよわいことを重々しつてゐた。それをしつてゐるにつけて、

『無常の世の中、明日にも病氣でたふれたが最期、それきりで萬事休矣、ふたゝび故郷の土をふまずにをはらにやならぬ。さうなつたら、なほもつて口をしからう。』そんなことをおもつた。

『旅のういこと、つらいこと、それもわかつとる。けれど自分は、そのうさ、つらさがあぢはひたいのぢや。』かうもおもつた。

かくて芭蕉は、自分を案じてくれる杉風、素堂以下の親切を、肝に銘してありがたくおもひながらも、そのいさめにしたがふことはできなかつた。

弟子たちも、この上ひきとめやうとはしなかつた。ことに淺草にすむ千里が、その故郷大和へかへるついで、供をすることになつたので、一同すくなからず安堵した。けだし千里はこの時の紀行、いはゆる「野ざらし紀行」に、

何某千里といひけるは、このたび路のたすけとなりて、よろづいたはり、心をつくしはべる。常に莫逆のまじはりふかく、朋友信あるかなこの人。

とみえ、芭蕉も一再ならずその家にあそんだくらゐで、すくなくも芭蕉に對しては、きはめて忠實な門人であつた。

四一　首途の句

芭蕉は、とりいそぎ旅裝をゝのへた。旅裝といつても、成金輩の大名式旅行とは品かはり、世をわび人の俳諧行脚とて、

腰間に寸鐵をおびず、襟に一嚢をかけて、手に百八の珠をたづさふ。僧ににて塵あり、俗ににて髪なし。

こいつた風の、一見雲水坊主とおもはれる簡單さで、それをこゝのへるのに、何の手間暇はいらなかつた。

いよいよ出發となると、門人らは、それぞれ送別の句をおくつて、道中の無中ならんことを祝し、かつ首途の句をこうた。

千里に旅だちて、路粮をつゝまず。三更月下無何にいるといひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をたちいづる程、風の聲そゞろ寒げなり。

その日は、風のさむい日であつた。

野ざらしを心に風のしむ身かな

『この旅、野ざらしにならうもしれぬ。どこかの松の下に、自分がゆきだふれになつこるとほりかゝりの旅人が、おや死人ぢや。雲水坊主らしい。かあいさうに。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。そんなことにならうもしれぬ。いや、さうなつた自分の姿が、今目の前にみえ

るやうな……』芭蕉は、かうした心で旅だたうとするのであつた。

門人らは、きくとひこしく、

『さても不吉な句ではある。』と、おのづから眉がひそめられた。

けれど芭蕉自身にこつては、この句、決して不吉ではなかつた。芭蕉は、つこに野ざらしを心にしてゐた。

『しんではじめて、野ざらしになるのぢやない。かうしていきとるうちからが、自分は……人は、みんな野ざらしぢや。』とくから、こんな心でゐた。

『といふのが、諸行は無常、諸法は無我。しかも、あるときがきて、はじめて無常なのぢやない。あるときがきて、はじめて無我なのぢやない。時々に無常、刻々に無我ぢや。人も、物も、その儼然こして存する際において、はやくすでに、無常、無我ぢや。經には、「諸法從本來、常示寂滅相。」とみえてをる。莊子は、「つくるを薪にみる。」といつてゐる。うゑてはくらひ、渇してはのみ、呼吸のかよつてをるいきながらの身そのまゝが、とりもなほさず、しんでをるのぢや、野ざらしぢや。』芭蕉は、つねづねかうかうおもつてゐた。かうおもつてゐ

たればこそ、事毎にさびを發見し、物毎にしをりをみとめることができた。

したがつて、「野ざらし」の一句も、芭蕉自身には、決して不吉でも、不祥でもなかつた。

秋十とせかへつて江戸をさす故郷

在府十有二年の芭蕉にとつて、江戸は、第二の故郷であつた。今故郷への旅に、かへつて故郷をさるの感があること、奇なるは、人の心であつた。

『これ、執着ぢやない。これ、人情ぢや。』芭蕉は、さうおもつた。

『君にも一句ありさうだ。』人々は、千里にせまつた。千里は、莞爾として、

深川や芭蕉を富士にあづけゆく

無造作にやつてのけた。

『庵の芭蕉も、こゝしばらくは、たれも世話をするものがあるまい。そのなりゆきをしるものは、ひとり富士があるのみだ。』千里は、そんなことをおもつたのであつた。

門人のたれかれは、ちかくは高輪、とほくは川崎、あるひは神奈川邊までもみおくり、

『では、お氣をつけなさいまし。』

『千里丈、たのみますぞ。』との言葉をもつて、江戸へひきあげた。

芭蕉らは、到頭二人きりになつてしまつた。と同時に、急に「旅」といふ感じにおそはれた。そしてこの感じは、爾後逐日に濃厚になつていつた。

四二　「道ばたの木槿」の句

ゆきゆいて、箱根の關をこえる日は、しとしとと雨がふり、全山霧にかくれてゐた。時は秋、晴天ならば、嶺につゞき、谷にわたる紅葉の錦に、二月の花にもまさるうつくしさがあつたであらう。ことに一天水のごとくにすみわたつた中の富士のながめは、また一入であつたであらう。

『あいにくの雨でございます。』千里は、かういつて殘念がつた。

けれど芭蕉は、

『いやいや、さうおもふのは、人間のわがまゝぢや。そのわがまゝをとりすてにや、自然の心はわかりかねる。晴は晴でよい。雨は雨でよい。富士をみぬのは殘念ぢやが、さびはかへ

つてこの間にある。』といつて、

霧しぐれ富士をみぬ日ぞおもしろき

との一句をしめした。

富士川の邊をとほるとき、三歳ぐらゐとみえる捨子が、あはれげにないてゐた。芭蕉は、その様子をみて、

『貧苦にせまつた親でもあらう、この川の早瀬にかけて、一ぢおもひにとつれてきたのが、親の情、それにはしのびかねて、しばしの命なりともと、こゝへすてたものとみえる。秋風のなかの小萩同様、今宵ちるか、明日しほれるか、いづれこのまゝしぬのぢやらう。さてさて不便なものではある。』と、涙ぐましい心もちになつて、袂からくひものとりだし、

『さ、これをあげやう。』と、その子ににぎらせておいて、とほりすぎながら、

猿をきく人捨子に秋の風いかに

平生私淑してゐる杜子美に、「猿をきいて實にくだる數行の涙。」といふ句のあることをおもひだしたのであつた。

子供は、いつまでもないてゐた。一町、二町ととほざかつても、そのあはれげな聲が、耳についてはなれなかつた。けれど旅中の身には、それをすくつてやることができなかつた。

いかにぞや、汝が父ににくまれたるか。母にうとまれたるか。父は、汝をにくむにあらじ。母は、汝をうとむにあらじ。たゞこれ天にして、汝がさがのつたなきになけ。

萬事を天に歸し、しひて心を鬼にしてさつた。

大井川をこえる日は、終日雨がふつてゐた。

『よくふりますねえ。江戸でも、指をりかぞへて、今日あたりは、大井川をこえるわけだがこの雨で、さぞこまるだらうぐらゐのことをいつて、みんなで心配してゐませうよ。』かういつて、千里のよんだ句に、

秋の日の雨江戸に指をらん大井川

ある街道をとほるとき、道端の垣根に木槿がうつくしくさいてゐた。芭蕉ののつてゐる馬が、首をあげて、その木槿をばりばりとくつた。それを見た一刹那、

道ばたの木槿は馬にくはれけり

かゝした一句が、口をついてでた。それは、みたまゝ、ありのまゝの姿であることに氣がつくと、

『この句のよしあしはとにかく、眞の俳諧は、みたまゝ、ありまゝのところにあるのぢやあるまいか。俳諧、外にはなく、自然すなはち俳諧かもしれぬ。技巧は、自然をきずつける所以で、ひいては俳諧をきずつける所以かもしれぬ。』こんなことをおもつてみた。

のち許六は、この句を評して、こゝにはじめて正風の體をみさだめたものであるとし、素堂は、もつて秀吟であるとした。けだし「みたまゝ、ありのまゝ」といふ點において、みづから啓發せらるゝところがあつたのであつた。

金谷でとまつた朝は、あまりにはやく宿をでたので、西の空には、二十日あまりの月がかすかにのこり、山麓の村々には、夜のこばりがいつあくともなかつた。ねむいおもひをしながら、馬上に鞭をたれてゆくこと數里、まだ雞明にいたらずして、こゝぞ小夜の中山ときくところ、芭蕉の夢は、はじめてやぶれた。ふと杜牧の詩に、

垂鞭任馬行。　數里未雞鳴。

林下帶殘夢。　葉飛時忽驚……

とあるのがおもひだされた。

馬にいねて殘夢月とほし茶のけぶり

四三　伊勢から伊賀へ

道は、いつしか伊勢路へはいつた。伊勢では、前に江戸からかへつた風瀑を松葉屋にさひまづもつて內宮へ參拜しやうとした。當時の法、僧侶の內宮にまうでることをゆるさなかつた。芭蕉は、勿論僧ではないが、頭をまろめてゐるところから、ひとしなみに浮屠の屬に擬せられて、むなしくひきかへし、夜にいつて、外宮にまうでた。一の鳥居の陰ほのくらく、御燈がところどころにみえ、峰の松風も、身にしむばかりであつた。芭蕉は、そゞろに敬虔の念をもよほしながら、

三十日月なし千とせの松をだく嵐

松葉屋には、ひきつゞき十日あまりも滯在した。一日、風瀑にみちびかれて、西行谷にあ

そんだ。むかし西行が庵をむすんでゐた舊蹟で、木立のこんもりとしけつたこころなど、その人その日の狀をしのばしめた。西行は、こゝの庵にあつて、

一生不レ幾。　　來世在レ近。

といふを座右の銘とし、濱の石をひろつてきて硯にもちゐ、誦經と詠歌に日また日をおくつたとのことであつた。芭蕉は、その閑寂をきはめた日常をおもひやつて、羨望にたへなかつた。

時に麓の流をみると、二三の女が芋をあらつてゐた。それにも西行がおもはれて、

芋あらふ女西行ならば歌よまん

歸途、ある茶店のそばにやすんでゐると、その家の女中、芭蕉をみしることがあつたとみえて、しひて内へ請じいれた。と間もなく、妻女とみえるのが、奥から白絹をもつてでて、

『私は、もと當家の遊女でございまして、今の主人にのぞまれ、夫婦になりましたもの。前の主人も、遊女を妻にいたしまして、その人は、鶴とまをしました。そのころ、大阪の宗因といふ俳諧師の方が、このあたりへこられたことがございます。お鶴さんは、その方にねがつて、

葛の葉のおつるがうらみ夜の鶴

といふ發句をかいてもらひました。』といつて、種々をかしいことまではなしだし、

『どうぞ私にも、名を發句にして、これへおかき下さいまし。名は、蝶とまをします。』といふのであつた。芭蕉は、頭をかきながら、

『いや、それはこまる。』

『でもございませうが、是非……』

『これはこまつた……しかし折角だから、何かかきませう。』と、筆をとりあげ、すらすらとかきつけたのは、

蘭の香や蝶のつばさにたきものす

妻女は、わけはわからないながら、非常によろこび、茶菓を供しなどして、芭蕉らを歓待した。

その地に某といふ閑人がゐた。芭蕉は、その茅舍をたゝいて、